青鞜

第十月號

大正四年十月一日發行（毎月一回一日發行） 第九號

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

第五卷
十月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十月號目次

兒童の世紀（飜譯）……一　山田わか
斷片（飜譯）……六　らいてう
逝く水（短歌）……二四　三ケ島葭
泣かましきこと（短歌）……二六　原阿佐緒
薄ずみいろ（小說）……三一　長谷川時雨
お小夜（小說）……四一　原田皐月

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白刄の跡（小說）……五四　荒木滋子
うづ（小說）……七〇　佐藤欽子
初戀のなりゆき（小說）……八五　岡田八千代
世間知らず（對話）……九三　岡田ゆき
青鞜詠草（短歌）……九八　數名
九月の歌壇より（短歌）……一〇三　諸家
感想より追想へ（手紙）……一〇四　生田花世
消息……一〇七　係員

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兒童の世紀——エレン、ケイ

山田わか譯

第一章

兒童の兩親を選擇する權利（二）

モーセが有効ならしめた東洋の結婚法を西洋諸國に於ては漸々と廢して來た。けれども東洋のメネス敎徒及びマホメット敎徒の立法者の如きは今猶此の法律に大部分準據して居る。支那に於ても亦同樣な禁令が有力である。此處、彼處に、西洋の學者の中に、ぼんやりではあるが、遺傳の意味の感じが、今、現れて來て居る。サー・トーマス・モーアはプラトーの如く、結婚前の身體檢査を必要とした。此の點に付いての子の權利に關する疑問が注意され始めたのは十九世紀になつてからであつた。一千八百十五年、ロバート・オーエンが着手した研究は子供の利益になる正常な感情を一般に擴めた。同氏の研究によつて、八歲以下の兒童等が一日に十五時間から十六時間、索鞭で打たれながら働かねばならなかつた事、及び、其のために兒童等の四割、五割は不具にされると云ふ事實が明白になつた。一千七百九十八年、マルサスは『人口論』を公にし、そして彼が此の作をなすに至つた、社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

會の狀態に付いて、世人の注意を惹起した。彼は人口過多の結果なる、糧食供給の不足を指摘し、あはせて、食物の不足が正當な結婚に障碍を與へた事を摘發した。又、此の狀態が、一部分は小兒の死亡率の增大となり、一部分は子殺しの增加に結果する事をも彼は示した。そしてマルサスは此の狀態に於ける、自然淘汰の意義、及び、其の結果、人類が退化するに至る危險をも見たのであつた。しかるに彼の此の說は大なる反對を惹き起した。個人としては善良溫和なマルサスも、他の道德改革家の如く、敗德、不義と云ふ破廉恥な呪詛をあびせかけられたのである。けれども彼は此等の襲擊を自若として忍受した。ハリエット・マーティノーがマルサスの說を辯護した時に、彼女はマルサスと同樣な經驗を嘗めさせられた。彼女が此の問題に付いての小說を書いた時、彼女は自身が如何なる位置にさらされて居るかを、よく自覺して居た。此の稀代の婦人——未婚のうちに、子を持たずに此の世を去つた——は未だ若年の頃から、兒童の神聖を深く感じて居た。十九歲の時、妹の出生に出會した彼女は、人類の驚くべき發達を其の最初から目擊できた事に對し、跪いて熱心に神に感謝した。此の同じ感情は、彼女の小說中に、人口の任意の制限の義務を說明せしめた。子供等が多過ぎる結果、兩親は彼等を扶養、敎育するに不可能となつた場合に、彼等が遭遇せねばならぬ運命を思うて彼女は苦痛を感せずには居られなかつたのであ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る。兒童の、此の方面に付いての權利に關して、諸國から種々の贊否の著作があらはれた。今は、至る處に、此の問題は論じられて居る。私は此處に兒童の權利の他の方面に關しての諸説の差を簡單に論じて見よう。

人種改良に今日必要なる要件は、フランシス・ゴールトンの名著『遺傳天才』に於て、殆んど云ひ盡されて居る。ゴールトンは既でに一千八百七十年代に於て、ダーウィンの後天的特性の遺傳説に反對した。此の點に付いて、獨逸のワイズマンはゴールトンに味方し、又英國のダーウィン一派、ロマネスはワイズマンに敵對し、議論はなか〳〵盛んであつた。

ゴールトンは人種改良の學問に、善種學と云ふ文字をギリシャ語から發明した。彼は云ふ。今日の文明人は、人種改良の點に付いては、古のスパルタは云はずもがな、野蠻人にさへも劣つて居る。スパルタに於ては、虚弱者、年少者、及び老年者に結婚を禁じて居た。そして種族の純粹、子孫の強壯を誇るために、幾多の個人は犧牲に供せられたのである。と。又ダーウィン、スペンサー、及びウォーレス等と同じくゴールトンは次の事實を指摘して云ふ。人間以外の自然界に於ては、適者生存を實現する、自然淘汰の原則は、經濟上の動機が、不當結婚を金力で可能ならしむる、人間社會には適用されない。と。實に貧乏は適當な結婚をさまたげて居る。其の上に同情心の發達が自然淘汰の原則をみだす一大要

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

素となつた。愛の同情は確かに個人の幸福になる動機に從つて選擇する。けれども其れが人種改良の保證ではない。健全なる子を生み得ぬやうな場合には、人は德義上、自制して結婚を控へたがよいと、或る著者等が望んで居るに對して、ゴールトンは、疾病、惡德、心身の虛弱を遺傳する結果の、人類退化をふせぐ嚴密な制度を主張して居る。彼は後天的特性の遺傳を否定したゝめ、益々自然淘汰に重きを置いたのである。

彼は、又、一方では血統上、立派な子孫を造る見込みのある家系の人々には、あらゆる手段を用ひて結婚を奬勵した。彼は、ニーチエの如く、結婚の目的は强健にして才能ある人物を造り出すにあると信じて居たからである。

文明人は、同情の結果、虛弱者、無能力者の生存をながからしめ、其のために適者の種族繼續を妨げつゝある事をゴールトンは說明して居る。ウォーレス及び他の多くの學者も亦、人類の退化を恐れるならば人は此等の問題に對して無慈悲の心で居らねばならぬと明言した。彼等は、又、下等人種が永存し、過多に增殖して、適者生存の原則を妨げしめる、道德的、社會的、同情的原動力を、新しい道德問題、新しい社會問題の見地に代へ、而して自然法は、愛他主義に、其の進行を阻まれる代りに、其れによつて支へられねばならぬと說いた。

スペンサーの思想は一大眞理を含んで居る。彼は前述の問題に關聯した點に付いて、かう云うて居る『思ひもよらぬ仕方で、後に、發達する多くの幼芽を我々は目撃する。社會のうち、及び個人のうちに意味深い變化が働きつゝあるが、此の變化は直接な結果としては待ち望む事は出來なんだが最後の結果としては信じて求める事が出來たものであつた。人類の進步及び退步を惹き起す自然法を見出すべき盡力は、幼芽に關する此等の理想の一ッである』と。此の方面に於ける科學的研究に關して此の哲學者のもう一ッの格言――此れは科學には度々見逃がされて居る――を我々は應用する事が出來る。それは『眞理を發見しようとする熱望は、人類の幸福を增進する熱望に伴はれなければならない。』と。けれども人類が眞面目に自己淨化を始むるのを、我々が期待するにさきだつて、科學は一般に受け容れられる結論に達して居なければならない。科學が其の結論に達した時には、前述の自己淨化は必ず始められるのである。人種學及び社會學の著作を繙き、野蠻人は結婚に如何なる制限を置いたか、又迷信的偏見の上に、宗敎的に、如何に其の制限に服從して居たかを讀む時に我々は文明人が未來に於て必ず科學的證據の前には服從する事を望み得るのである。これは決して過度な樂天的考へではない。

ウオーレスはゴールトンの如く、劣等者の結婚をこばみ、優等者に結婚を奬勵するやう

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な過酷な規定を主張はしなかつた。彼は此の問題が極めて複雑である事を認めて居た。とにかく、男女相互の愛が人種改良に缺くべからざる要素であると云ふ事は明白な事實である。もし人間が懸賞家畜のやうに容易く造られるやうなものならば卓越した人物なぞの出る筈もない。中世紀の人種が退歩して居たのは、最も優れた人々が寺院に逃れ、最も劣等な人間が子孫を造つたからであるとゴールトンは云ふ。けれどもゴールトンの要求するやうな嚴密な條件がそなはつてから、始めて結婚を許すと云ふ事になれば、結婚の深い意味は失はれるのみならず、猶又種族は最も貴い遺傳をも失ふ事になるであらう。

けれどもゴールトンの原則に嚴密な制限を加へ、彼の要求に寛い制限をほどこしても、猶、科學は既でに彼の原則に付いて多くの眞理を證明した。そして彼の要求の全部を是認しなければならなかつた。子供の兩親から遺傳した性質は、兩親の性質とは全く異つた、かたちで現れる事がたび／＼ある。三百人の白痴のうちで、百四十五人迄は飲酒家の子であつた。癲癇病者も亦飲酒家の子である事が多い。又、外見は全く健全な人が突然、兩親の有つて居た或る病氣に、兩親が冒された年配になつてから、襲はれる事がある。けれども一ツの悦ぶべき事は兩親から遺傳された惡質に人は意志の力によつて抵抗し得ると云ふ證據である。又、一方の親の病的性質が他方の親の健康と中和して子の上に現れると云ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事も道理ある事柄である。けれども此等の説、並びに、此の説に含まれた他の多くの諸問題は未だ〳〵最後の斷案には到達して居らぬのである。

モーヅレーは特に精神病の遺傳に關して研究した。そして兩親の神經病及び精神病が子供の上に其の性質を變へて現れる事を發見した。そこで、彼は結婚をする前の健康診斷を要求し、また、結婚後現れた精神病は、正當な離婚の理由とすべしと提唱した。古代の貴族が結婚するに家系を重視したやうに、未來の結婚は、新しい意味に於て、血統の純潔を重じなければならぬと彼は主張した。モーヅレーの叙述の一ツは非常な趣味に富んで居るから、私は此處に其れを紹介して置く。彼は曰ふ。『父が富を得るために、全精力を傾注して居ると、其の人の子は不完全である。何故ならば神經をあらん限り緊張させる事はアルコールや鴉片と同じく身體の組織を破壞するからである』と。もし此の説が確乎たるものならば、富と權力を得るに汲々として居る、今日の社會生活が如何に人類に有害であるかに付いて、既でに存在して居る諸説に加へて更に又一説を我々は得た事になる。而して、これは、事業及び生産に新しい目的を與へるやうに、生存のかたちを變へねばならぬ證據である。各人は彼の生活を廣く又完全に營むべく要求しなければならぬ。そして各人は自身の全き生活と等しい生活を營み得るに適した子孫を社會へ殘すべきである。こうした時

代に人間が到達し得た時、或る畫家が今日の富豪の子の代表者として保存して置いた一少年の肖像を、人が見るならば、彼はその顔に恐るべき間歇遺傳を發見するであらう。

私は文學の方面から、此の問題に於けるニィチヱの説を述べて見やう。ニィチヱは彼の『超人』の理想をダーウィンの説の上に直接に基礎を置いては居ないけれども、ブランデスが此の頃云ふたやうに、彼の作はダーウィンが未だ豫期しなかつた、ダーウィン主義の大なる結果である。『今日の人間は橋である。動物と超人の間の過渡期にある』と云ふたニィチヱの確信は同時代のどの人にも見られぬ强さを現して居る。此の關係に於てニィチヱはゴールトンと同じ嚴格な態度で人種改善に對する人間の義務を促した。けれども彼は其れを科學的證明を持てゝなく、詩的、或ひは豫言的態度で云ひ表はして居る。

此の問題に付いての著作は續々と增加する。そして相容れざる諸説が後から〳〵あらはれて來る。此の時にあたつて『人種の退化を防がうとするには、我々は社會上及び人類學上の要素を顧慮せねばならぬ』と云ふた、獨逸の社會學者クレラの警告は我々の注目に價するものである。クレラの論旨の主眼とする處は、ダーウィンの後天的特性の遺傳説と其の反對の説に重きを置かない事である。ダーウィンは、兩親より、子に遺傳される胚種血漿 Germ plasm は一定不變であるから、よい子供を造るには父と母の長所が取り合はされ

そして又自然淘汰によらなければならぬと云ふ說である。此處で、我々が注意せねばならぬ事は、社會的及び政治的の行動をとる前に、我々は人類的動機、則ち人類改良と云ふ考へを基礎として置かなければならぬ。クレラは又最後に云ふ『我々が人類を文明に導き、向上せしむる計畫に着手する前に我々は、スペンサー、ゴールトン、ロンブロゾー、フエリー、リボー、ラッウルノー、ハブロック・エリス、ヘークラフト、コラジヤンニ、セルギ、リチー等の著作から材料を集め、其れを組織的に修正せねばならぬ。換言すれば、我々が社會學者になる前に我々は動物學者、人類學者、心理學者であらねばならぬ』と。

知的特性に關して、非常な天才は其の特質を母から遺傳されると、主張された。此の事實は、今日に於て、偉人を生んだ母達に對する世人の興味を增加した。これは子が男である場合だが、もし娘が天才であるならば其の娘の能力は父方から遺傳されてあるやうに信じられて居る。更にもう一ッ確かに信じ得る說は『一ッの血統の中に傳はる特質が或る一人の上に、世界的天才の高度に迄、あつめられた時には、其の偉人は大抵子を持たない。もし又持つたとしても其の子は多くは平凡である、ばかりでなく時としては無能力者である。』と云ふのである。これは自然が此の一大人物を造り上げるために其の生產力を使ひ盡したのかも知れない。或ひは又此の天才の智的方面の創造力が生理的方面の創造力を減じ

たのかも知れない。

遺傳の問題と相並んで、種族發達の問題がある。ダーウインは彼の『原種論』の卷頭に於て、高等なる人種を造るためには、如何に血統の純粹を必要とするかを說いた。此の說を論據として、或る近世の排猶太の著者は『血の純粹に關しては猶太人は人種の好標本である』と論じた。最も著しい猶太人の代表者なるデスレリーは次の言葉で此の同じ思想を云ひ表した。

『人種の純粹があらゆるもの丶源である。人種程尊いものはない。故に不注意に他種屬の血を混合する人種は滅亡する』と。けれども又他の專門學者は或る種族と或る種族との血の混合は其の子孫のために大なる利益があると云ふて居る。

ウエステルマルク敎授は、戀愛が肉體の美に連繫する意味、及び其の美が人種のために要用である事を正しく說明して居る。曰く『肉體の美は、動物と人間を區別する特性、兩性を區別する特性、及び種族を區別する特性、これ等が充分發達したものである。これ等の特性のある人々は彼等の天職に最も適して居る、のみならず外貌も亦美しく、相手を引きつける大なる力をもつて居る。がこれは自然淘汰の結果である。こう云ふ人は、個人としては身體の完全な諸機關を具へ、性的動物としては彼等の性の任務を果し、人種として

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は彼等の周圍の狀態に最もよく適合して居る。生存競爭に壓倒される者は此の競爭に適合しない個人を愛する愛の本能を持つて居た人間の後裔であるし、又此の競爭に勝利を得る人は此の競爭によく適應した人間の子孫である。こう云ふ風にして、周圍の狀態に最もよく適した者が最も美しいと云ふ、人間の趣味が發達して來た。であるから、健康、則ち外界の襲擊に對抗し得る力は美と同一であり、又人種及び性の純粹のかたから外れて居る者は、外れて居るだけ、それだけ健康も美も其の度が減つて居ると云ふ事になる』と。

又他の著者は此の說を確かめるために足の形を用ひた。恰好のいゝ踝の、小さい、弓形の足は一番美しいと其の人は云ふ。かような足は其の骨格が細くて、强く、そして彈力性を有つて居る。こう云ふ足は彈力性がある計りでなく、扁平形の足よりは、重きにたへる力を有つて居る。そして步む際に又跳躍の際に肺や心臟の活力を增す。故に其の步行を自由に、容易に、確實に輕快にそして嚴かにする。此の足の特色が美であると同じ道理で、肉體の强壯及び安靜が直ちに精神に影響を及ぼして自信を得さしめ、そして生活の喜び及び其の優越の感じを增さしむるのが高等人種の特徵である。

此の說はどの位の程度迄眞理であるかは容易に定め難い事ではあるが、とにかく、此の說は漸々と勢力を得つゝある。則ち此の說に從へば、肉體と精神は其の周圍に適合する事

によつて、相互ひを援けて發達して行くのである。

故に、如何なる條件が人類の淘汰を最も有効に促すか、又如何なる外界の條件が自然淘汰の中に出來た特性を強め、或は弱める事を研究する必要がある。そこで我々は肉體の運動の要用な事を考へねばならぬ。けれども此の肉體の運動に付いて我々が曾て嘗めた苦い經驗は、狂的競技熱の結果を防がねばならぬことを我々に教へて居る。かやうな競技熱の結果は殊に母態に關して婦人に有害である事を證明した。けれども空氣の新鮮な場所で、遊戯體操、徒歩競爭、及び瑞典農夫の舞踏を變型したやうな舞踏なぞは新時代の改造に最も適した手段であらう。

美術が人種改造に影響を及ぼす事は、人のよく知る處である。畫家バン・ジョンスが英國婦人の新しいタイプをつくつた事は爭ふべからざる事實である。彼が婦人の標本として、ゐるがいた、温和な高尚なスタイルは漸々と婦人達に適用された。英國の婦人は顔のかたち計りでなく、其の表情迄も彼の理想に似かよつて來たと云ふ事は、彼の畫のうちの若き英國婦人を見ればすぐ分る。彼は、若年者が未だ其の事に付いて、氣付かぬさきに、彼の理想を彼等の心に刻して置いたのである。彼等は、彼等の畫帳の中に彼の理想を見、其の理想を目前に置いて發育した。そして彼等の服裝迄も此の美術家の畫のうちの人物をまねて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仕立てられるやうになつた。これに付いては、他のもう一ッの理由がある。それは希臘婦人の婉麗な容姿は、希臘の塑像の感化を受けて居ると同じやうに、今日の母達はパン・ジヨンスのタイプを子供等に傳へたのだと想像されてゐる。古代に於ては、他の小さい事柄に關してゞすらも、たとへば、彼等の常に慾望して居る金髪のやうなものでも、適當な方法をまもる事によつて、得らるゝやうに信じられて居た。

母の上に及ぼす、かう云ふ種類の外部の影響の意義に付いては、其の結論をひくに適當な材料を我々は未だ持たぬのである。又此の點に付いて、學者等は皆不一致である。であるから私はこれを他の事柄の中に、唯、附帶的に記載して置いた。我々は人間出生の狀態に付いて最後のそして確かな洞察を得る前に此等の事柄に付いての凡ての說を建設して置かなければならない。けれどもこれに對する科學的知識は今の處では全く缺けて居るから、如何に內外の狀態が人間の出生に影響するかを說明する、前世紀に始まつた廣義の研究と文學とを、我々は唯參照するだけである。故にこれ等の事柄に關しての多くは未だ朦朧たる中にあるのである。けれども、これに對する知識を、今や人間の靈は、生まうとして居る。故に、新しい思想は漸々と創造されるであらう。

これに關聯して、これ等の範圍に於ける、法則の新しい觀念の發達を、私は今論じなけ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ればならない。峻嚴な異教の社會に於ては、虛弱な、或ひは不具な子供は棄てられたのであつたが、これに反して基督教の社會は、生理上、心理上、不治の病にかゝつて居る子供でも、又は見苦しい、そして其の見苦しさが當人にも、周圍の人にも絶えざる惱みを與へて居る場合に於てゞすら、さう云ふ子供の生命を長からしむるやうに、つとめる程溫厚である。けれども死刑又は戰爭を實行する社會に於ては、他人の生命を消滅せしむるやうな事を平氣で提言出來る程に、人命に對する尊敬が充分强くないのである。唯死刑囚に憐みが加へられる場合には未來の人類は、一定の取締りのもとに、責任を負うた醫者の手によつて、苦しみのないやうに死刑を執行するであらう。けれども基督教の社會は正出の子と不正出の子とを未だ區別して居る。が此の區別程、兩親の義務に付いての本當の道德の概念を妨害するものはない。凡ての子供が其の兩親の兩方に對し同等な權利を有つて居る。又凡ての兩親が其のどの子供に付いても同等な義務を有つて居る筈である。この道理が認められる迄は、男性女性の共同生活に付いて、未來の道德の基礎はきづかれないのである。いつかは、社會が戀愛關係を個人の責任にかゝる私の事柄と見る日が來るであらう。其の時には戀人等及び既婚者は、彼等自身を全く自由と感じ、又社會もさう認めるであらう。感情に從つて取り交した束縛的な約束、排他的に相手を所有しようとする要求、此等は、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感情の細やかに、充分發達した人には、低級な人間の戀愛的情操の遺物として見られて居る。かやうな感情は、支配權、虛榮、蠻行、及び盲目な情慾に對する欲望から起つた事である。完全な貞節は完全な自由によつてのみ得られ、完全な個性の受授は完全な自由のうちに行はれ、完全な優越は完全な自由のうちに生れると云ふことを人々は理解し始めた。自分の對者に自分の感情、意見、習慣、及び嗜好を强いてはならぬ。各人は自分に對する相手の感情の恒任を自分の幸福と見て居つて、權利と見てはならない。又相手の自分に對する感情の斷絕を自分の不幸と見て、不公平と見てはならない。かくしてこそ、二個の靈の間に充分な、純粹な自由があり、そして兩方が絕對に獨立して居つて、しかも全き和合があるのである。

　自由が貞節を危うはしない。敎會及び法律が要求するやうな貞節は、確かに敎育上有力な手段であつた。けれども其の方法は其の目的に相反するものであつた。なぜならば、これは占有と云ふ感情を造つてしまつた。そして戀愛を崇拜する心を失ふやうになつた。腕力に基礎を置く要求は靈性及び官能の愛に敵意を起さしめた。けれども輿論を恐れて、男と妻の間及び彼等を世間の間にあらゆる不信實な行動があつた。强迫の繩が取り去られた時には人の感情は强められる。なぜならば、貞節の外部の支へが缺乏する時には、其れに

對する必要な力は内部から生れて來るものである。たとへ、人間は常に彼等自身に付いて、又愛の目的に付いて重大な誤謬をなしがちなものであるけれども、又たとへ、月日が人間の性質及び感情に變化を與へるけれども、又たとへ、相愛から結果した結婚に於てゞすら『結婚によつて人生が破壞されるよりも、結婚を破壞したがよい』と云ふたニイチエの言を正當とするやうな事情が起ることもあるけれども、猶全體から見て、自由は貞節を奬勵する。して貞節は常に、其の心理學上及び倫理學上の價値の經驗に支へられて居るのである。

　大なる愛の幸福のために、人が、準備すると云ふことは、輕々しく男女の關係を結んだり、解いたりするのではない。自由意志の貞節は、高き人格の標(サイン)である。何故ならば、これは人生の意義の中心に其の意志を集中するものと假定するから。そして各人固有の眞の自我の一致を意味するのである。これは愛に於ける貞節と同樣、あらゆる他の眞實と云ふことに付いて眞理である。唯、愛が毎日の實踐的宗教であり、安息日の祈禱であり、又靈の絶えざる監督のもとにある時、又人格の絶えざる發育である時、これが偉大なる愛である。(此の場合に、何故、古いけれども立派な「神聖」と云ふ言葉を用ゐてはならないか。)此の時にこそ、人間は、前時代の結合よりも、高尚な權利を有つやうになる。何故ならば、此の時に於て、始めて、我々の最も高き自我に對して本當の貞節があるのである。けれど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も結婚が此の性質を有たない處には、此の權利も存在しない。かゝる場合の結婚は、大なる情熱のために宥恕し得るとしても、それは取るに足らぬ感情である。一時的の結合の結果、生れた子は、其の兩親が不完全であると同樣に不完全である。或る壯年の醫師が嘗てから云つたことがある。「偉大なる愛は、其の愛の所有者の生命に深く喰ひ入つて居る。だから、もし其の人がその愛の對者を失つた場合には、彼は、最早、自分を全體としての生命として感ずることは出來ないで、二つに裂かれた生命として感ずるのである。けれども自然は一度より以上の戀愛を可能にして、人種の滅絶を防いで居る。併し自然の理想が何であるかは疑ふ餘地はない。若き男女が其の最も深い、初戀で結合したならば、此等の男女が生む人間は最も完全で、強壯で今日の人間とは全く違つたものであるであらう。けれども今日の社會狀態では、若い人々が愛をもつ時には彼等は結合のてだてを缺いて居るし又彼等が其のてだてを得た頃には、彼等は最早、以前に感じたやうな深い愛はなく、唯僅な衝動によつて結婚をする。この衝動はよしんば眞實なものであつたとしても、併し彼の愛の實體は既でに失せて、今の配偶は、唯、以前の愛の代用物に過ぎない。(つゞく)

斷片

らいてう

（エレン・ケイより）

○

戀愛の自由によつて賣淫制度を絶滅せんとする青年の欲望は性的道徳のより高き發展の證明の一つであるが、自由離婚によつて姦通を絶滅せんとする現代の欲望も亦その證明の一つである。

○

種族は一夫一婦制のために存在するのではなく、一夫一婦制が種族のために存在してゐるのである。だから人類は一夫一婦制の支配者であつて、自由にそれを保存することも出來ればまた破壞することも出來る。

○

自由離婚の辯護者すらそれがさまざまな弊害を含んでゐることは十分よく知つてゐる。

併し同時に彼等は新しき社會形式から生ずる弊害に對する不安ほど人間精神の信ずべから

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ざる懈怠を證明するものはないといふこと丶、斯き弊害は無神經極る平穩をもつて默許されてゐるといふこと丶を知つてゐる。

自由離婚がいかなる弊害を含むにせよ、それは結婚が生んだそして今なほ生んでゐる弊害以上に決して惡いものではない。現代の結婚は凡そ近代生活が示し得る最大なる自由の侵害であつて、最も粗惡なる性的習慣、最も無恥なる取引、最も苦悶を與へる心靈の虐殺者であり、最も殘忍刻薄なるものである。

○

永遠に對する戀愛の欲求が戀人等を驅つて、永遠に信實な誓をさせるより當然なことはない。またこの約束を捕へて、その上に法律を制定する社會の惡魔的計畫より眞實なものはない。と同時に人々が相互に戀愛の約束、信實の誓によつて支へられた法律上の權利を廢止するより必要なことはない。

人々がかれ等自身の法則を理解すればする丈、良心あるものは次第に約束することを躊躇し始めるであらう。なぜなら彼等は何時內的要求によつてそれを餘義なく破るかも知れないからである。

結婚の約束をなし、或は戀愛が消滅して、他に對する愛が目醒めた時、結婚を繼續し若

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しくはその繼續を要求することは不可能だと考へる人々の數が次第に多くなつてきた。

○

戀愛的に高尙な現代人は、最も深き屈辱の觀念なくして、自己の愛せざるもの、若しくは自己が愛せられてゐないことを知つてゐる人に從屬することは出來ない。かくして一方の若しくは相方の愛なくして固守せられる結婚はこの屈辱、若しくは一生の獨身生活によつて深き苦痛を結婚者に與へる。

これが問題の心髓なのであるが、このことは子供のことのみに注意を奪はれて、兩親も亦かれ等自身一個の目的であるといふことを忘れてゐる人達によつて閑却されてゐる。子供等のために兩親が種々な罪惡を犯さなければならないと思ふものはあるまい。自分の子供を養育せむがために紙幣僞造の罪を犯した婦人は無論非難されなければならない。然るに「自分の子供のため」に年々その結婚に於て、彼等自身賣淫を感じてゐる婦人は寛大に批判されてゐる。

結婚者にして兩者の戀愛的要求が少い爲め、友としての生活を繼續するものがある。またに愛がなくつても共棲の屈辱を感じないものもある。これ等の人々は恐らく家庭を維持することによつて子供等のために最善を盡してゐるのであらう――併しこれは同じ狀態の下

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

にある他の人々をかくして凡る總ての價値を失へる人生の苦痛から遁れさせることは出來ない。そして畢竟かさなくば離婚に終るのはこれらの人々なのである。

〇

戀愛が消滅した後でも兒童の養育に彼等二人の手が必要なところから離婚しない場合があるとしても、それは只親としての職分が殘つてゐる丈で、眞の結婚生活が續いてゐるのでないのは勿論だから、かういふ心の離れた夫婦は決して新しい生命を更に造り出してはならない。

〇

戀愛の永續なき場合に於てさへさまぐな困難、記憶、喜び、悲しみなどが男女を結び付ける、また最も深き意味に於てかれ等は別れ得ない、何故なら一方の性質の大部分が他方に殘つてゐるから——これは實際に於て羈絆となつてゐるので、それが明白であらうが、不明であらうが、堅實であらうが、自由であらうが、少なくとも義務の觀念ではない。若し或る場合に於て結婚生活が夫婦の感情を涸渇せしめ、一陣の風が枯葉の如く彼等を吹き散らすとも、或はまたそれがそれらの感情に深き根を下し、あらゆる葉がひきちぎられ、人生が恰も冬の枯枝の如く空虚に見えても——それはなほ共通に生きてゐる。

かくして最初に於て、官能の愉樂を傳へた男若しくは女が相手の男若しくは女に對して決して忘れられない記憶を保存するといふことは生理的及び心理的事實である。男の死後數年を經て、女が時として最初の男に似てゐる子供を産むといふことさへ云はれてゐる。かくの如き影響は女子の場合に於て一層明かであるから、女子の貞節はまたこの理由によつて男子のそれより一層自然的に必要となつてきた――たとへその程度こそ少いが、同一の影響は男子にも當てはまるにしても。

○

結婚は斯の如く人間の靈肉生活の狀態の中に確固な同盟をもつてゐるから、人は離婚の自由が一夫多妻制と同一になることを恐れる必要はない。この自由が廢止するところのものは唯た一生に亘る奴隷狀態である。

○

男子がその妻を捨てんとする欲望を制限する强迫に信賴する所の人々は如何なる程度まで、今日に於てさへ精神的の力が法律の强迫にも拘はらず、離婚を容易ならしめてゐるかを忘れてゐる。何人も現代に於てその相手たる男若しくは女の意思に反對してまで相手を保留しやうと主張するやうな倨傲な夫若しくは妻を發見することは、離婚の結果が明に一

方の破滅となることが明である場合の外は稀である。通則としては離婚拒絕の權利を振り廻す人々は狹隘なる人か或は下劣な人かである。若しこの權利が廢せられるとも、これは現今に於てさへ結婚者を結び付ける方の消滅をもち來すやうなことはあるまい。

○

大なる離婚の自由が與へられる時、輕卒に別れる人々は今強制結婚に於て、密に相互を欺く人間と同種類のものである。

眞摯なる人にとつて、離婚は常に眞摯なものである。思想あり、感情ある人は自己を愛した人を、または愛する人を意識的に傷けるまでには彼れ自身まづ大なる苦痛を嘗めたのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

逝く水

三ケ島葭

秋風のたちそめにけり目を閉ぢて失せたるもののゆくへ追ふ朝

夕ぐれの野にきて立てば月も見えず耳もきこえずなりし我見ゆ

何ものかたのみてわれの打もだしありしひと日の今暮るるなり

言葉もて戀ひしといふは悲しかり弱き心とあなづらるとも

鉢あまた載せし二つの吊臺に揺られて來る朝顔の花

我としてなほ明らかに言ひもえぬあきたらなさにみたされてゐぬ

秋立てばまづ涼しさをよろこびぬもの思ふ日のいつかあるべき

わが心よわしと叫ぶ一言になほひと恨む心交らん

看守より少し離れて靑草を刈る囚人をみればうれしき

わがたのむ一つの道もときにふと迷はされたる野の心地する

みにくくもことにふれてはいらだちぬおきらめやすき心にも似ず

秋の雨おのれ衣を重ぬれどはた座れども寂しかりけり

一日だに別れてあればたちまちに戀しくなるを飽くとさへいふ

ふけゆけば蛙のこゑも冴えかへる初夏の夜となりにけるかな

今更に男を惜むわれのさが思ひあはせてをののくおのれ

うれひあふ身ともおのれはおもはねどあやしきまでに默しつゞくる

思ひ出をかたる男の一ことに打たれてものをおもふなりけり

洗ふなといはるる襯衣をとり出だしうち濯ぐまでおとろへにけり

よろこびもはたかなしみもあらざるかさびしきまでに疲れおぼゆる

このわれが思ふといはばいやさうにうとまれんなど思ふなからひ

相遠くへだたりてのみおもひうる君にかあらん涙流るる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さかいきを半剃りたる幼子を男かい抱く夏の夕ぐれ

わが心今眠れりとおほらかにいふなり何をたのむ心ぞ

眠りたる男の衣にふるるだに今は欺くここちするかな

このままに眠りつづけよ覺めてただ歎くにすぎぬこの身なりせば

かの屋根に光る露すら身に重き心地もぞする男とあれば

たはむれをいひたまふかと思ふまにあまた君の怒りたまへる

はかなかることとおもへど後の日をたのむほかなほすべなかりけり

苦しみを同じうせんと思へども身を忘れなばいかがすべけん

あはれ身の何となりしぞ靜けさに目さへ閉づれどまぼろしもなし

大空の日を仰ぎても口惜しき心なれども老いそめにけん

めづらしく我の心のさやかなる夜とよろこべば蟲の鳴くかな

恨めしき男とともに歩むなり木槿花はな咲く郊外の墓地

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

墓の土しめやかなるを踏めどなほなやましき身は石に裂かまし

恨みつつともにあることそわりなけれ別れなばなほ戀しからんを

ああ心君をば君と思ひえぬ悲しき日なり君の恨まる

束の間のつゆの光となみすれど美くしきこそ泣くべかりけれ

夕空も見ずしてわが子眠るかと眠りそめしを抱きて下り立つ

君もただこの子ばかりが味方ぞといひつつ今日は幼子を抱く

いたましく夏の夜あけぬ子の泣きて君もおのれも睡らざるまに

子守うた謠へるひまにわか心歌ともならず消えうせにけり

とく立てと君兒の手をばとりていふその時われを捨つといふごと

答ふべきわれかと思ひ片言をふといひそめし子にをののきぬ

タオルもて子をば包めどわが濡れしからだに秋の初風ぞ吹く

汗ばみて眠りに飽きし子を抱けば未明の窓に蜩の鳴く

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

泣かましきこと

原阿佐緒

夜晝なくものなやみせる汝が母の乳の涸れなばといとほしみ抱く
兒に頬寄せあれ雨よなど云ひながら涙を流す母の眼を見そ
兒が外を泣きてかへるも見むとせず暗らき沈默にとざされし身は
君吾にかくし忘れし毒の壺のぞきけるより狂ひそめしか
髪も身もひきちぎりたき心地して秋風にたつ吾ぞ魔のごと
あたらわがまことも君に値ひなくうらぎられつつありしかなしさ
ざんげせよ悔いよと人を責むるわが心猛りて雨をみつめし
心よりなさぬ罪にも悔いて泣くわが美くしさわがおろかしさ
新らしき日にのみ待ためいつはらぬ君がまことを君が情けを

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ねたみなどよわき子ばかりするものと苦がき笑らひを自らに強ふ

足の指冷えしをおさへ泣かましきことを思へる秋雨の晝

人妻のひとりゐてふにうちさわぐやからの中にありわびにけり

力あまり何にも吾の抗らはん心がまへの今日ぞをかしも

人らみなわれらが生きのいとなみの全からぬをあざめるらしも

戀人の面影も見ゆ銀色の小さき羽蟲の舞へるまなさき

戀しとふささやきの如しのびかに朝けの蚊帳に通ふ秋風

かくひとりいつまであらむ秋の來て肌も荒れなむ君を見ぬ間に

忘れしや思ひいますや知らねども兒を見せまほし君を見まほし

兒がちさき手にも撲たせんおろかなる母よと涙まろぶこの頬を

消息を待つにも勞れ淋しくもなげやりに日のゆくにまかする

さびしなどわぶるいとまのあらぬまで心とらふるもののあらじか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

灯もささぬ蚊帳ぬちにねて夕ぐれの秋風をきくひとり病みつつ
わが背子は遠し兒はまだ乳ばなれもせぬにはかなや病みそめし秋
ものを書く指の細りの眼にたちぬ秋の來てかや人戀ひてかや
あな善しと思ひしのみに摘まで來し花をふとこそおもひ出でたれ
肉の破るるばかり病め痛めこころの苦惱しばわすれまく
蒼暗らき晝の嵐に音をひそめ鳴くこほろぎに病む身さびしむ
嵐こそわれの心に共鳴す呪ひごころの荒れすさぶ今日
樹々の葉の生々しきがひきちぎれとぶもここちよ嵐吹け吹け
嵐の中桐の廣葉のうらじろのたまたま光り搖るるさびしさ
夕さりて嵐なごめばものの樹の病ひめきてぞたてるかなしさ
得て後に悔いなとばかりわがのぞむものを與へし君は怖ろし
何事かあせる心につきまとふかなしみに堪へ今日も暮れけり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

薄ずみいろ

奈々子

私にこんなものをかいておいて、誰に見ていただかうといふあてもありません。親にも妹にもはづかしくつて見せられはしません。これはほんのわたしの心ゆかしでせう。自分と自分に書殘して、魂を慰めてやつてゐるのでせう。わたしの薄墨色のくらしも、まあこんなものでも書いてゐて、自分を悲しがつてやれるように、心にゆとりのできただけが、すこし諦めのついたしるしかと思ひます。何にも云はないで死でしまうといふことは、よつぽど傑い人でなければ出來ないことでせう。わたしは自分と、とはずがたりをするだけでも屹度、汚されぬ靈魂の童貞といふものがあれば甦つてくれることゝ信じてゐます。わたしは廿歳の女ですが、もしも此「薄ずみいろ」が人樣の御目にはいるときに、今時こんな古い思想をもつたり、こんなみじめな自分といふもののゝない暮しかたがあるものかと思はれるかもしれません。けれどもわたしは下町の、大店の藏と藏との間のあんまり現代の風が急にはゝいつてこない、堅氣一方な場所に生れて、生れたてには大變に長命をした、文化うまれの大祖母さんや、文政何年とかの祖母さんたちがゐて、その方達のお部屋には、行燈をつけてゐましたし、二人　老女は前帶に結んで、おひきすそでゐたほどですから、家内もよつぽど世間とは足並が遲れてゐて女といふものは三界に家なしといふ流儀に育てられてきたといふことを、すこしでも知つてゐていただかない

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と、わたしといふものゝ苦しみは、屹度くだらないものに違ひないと思ひます。わたしはまつたくくだらない涙に自分の一生をくらさしてしまつて、名もない小さなお墓の主になつてしまうのかもしれません。あんまり自分が可哀さうなのです。けれども我儘なのかもしれません。何處の國に嫁づいて、自分の身が穢れたと苦しむ女がありませうか。

わたしは寺小屋育ちで、現代の風には吹かれたくつても吹かれることが出來ませんでした。結綿に結つてゐるわたしの髷の下の頭の心には、學問もなければ考へもありはしません。なんにもしらない從順なわたしといふものばかりしかありはいたしません。そのわたしが一人で切ながつてゐることが、もし惡い、ゆるせないことなのならば、わたしといふものはもつと強く苦しんで、早く此世にゐなくなつてしまう方がよいのだと思ひます。わたしは此書きかけを、簞笥の底へかくして見たり、帶上げの中へ入れて見たりしてゐます。もし目つかつたら大變です。あの人に見られたらば、「張り殺すぞ」と怒鳴られてわたしはあの太い腕で一打ちに殺されてしまふのに違ひありません。わたしは死にたくないことはちつともありませんが、あの人に息の音までとめられるのは嫌なのです。あの人が厭はしいばつかりに苦しんでもゐるのです。といつて决してあの人は惡人ではありません。善人すぎるのかも知れません。お金持ちで、ちつとも敎育がなくつて酒呑で、お酒のために眼病みをしてゐる人です。

わたしは祖母さん子に育てられて、年頃の御友達をもたないせいか、ほんとに好き嫌ひがはげしいのです。子供のをりは食べるものも嫌いな方が多かつたと覺えてゐます。豆腐がまつしろでぐにや〴〵してゐて、冷たさうなくせに折惡く暑かつたので氣味惡がつたり、まつ黑にすつぺりした茄子が大嫌いであつたのを、飯事の遊びにお齒黑だといつて口に入れられた晩に、急に胸を差込ませたりしたほどでした。よく祖母は、この子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は妙な子だ、一目見て嫌だ、厭ひださいつた人は、不思議に好い人ぢやないさ云つたりいたしました。私はそれが病氣なのでせうか。女は生涯にたつた一度嫁づくものださ、ちいさい時から言ひきかされて、死んでも歸られないさころださ思つてゐるのに、撰りもよつてさう〳〵その病氣がこない前から出てしまひました。

口だけでは親切な出入の人達や、心の病を知らない慈愛の深いみよりの方達は、あの醫者がよいの、この藥がよいのさ云つて下さいますが、私のこの瘦れはなんで癒りませう。二六時中心が顫へてゐて、虐げられる弱い魂が、反抗して苦熱を起して惱んでゐるのですもの。

もつさ働けば元氣が出る、考へこんでゐるのが病氣の源ださみんなが云ひます。わたしも働いてわすれられる事ならば、堀井戸の水を日に何十荷くみあげようさ、石垣の石を幾度背負てはこばうさ、靈魂さへ樂に休ませてもらへれば嬉しいさ思ひますが、わたしの寢室はわたし一人の自由にならない牢獄で、わたしを保護してくれるさいふ美しい名の下に、黄金の鍵をもつてゐる人があつて、わたしは妻さいふ名の下に操をたてるこさの出來ない猿轡をはめられてしまつて、見えぬ鎖で足械をかけられた五體は、云ふこさも出來ない屈辱をしのばなければなりません。私は思ひつかれたすこしの間の晝間の眠りにも、懐に蛇が巢ふようで切なさに叫ぶこささへあります。

わたしは自分一人がよいものになつて、あたりの人をみんな惡いものに書こうさは思ひもしません。わたしの心一つが鬼をも生み蛇をも生むのは知つてゐますが、女さいふものは、こんな心持ちをもつてゐるものもあるさいふこさを、誰にも話せないのが可哀さうだと思ひます。廣い世の中のことゆゑ、同じような氣の弱い方が一人や二人はあるでせうに、お互に死ぬまで洩らさないこさですから、泣きあふこさも出來やしません。

わたしは身の廻りに、何か變つたこさがあればいゝさ思ふようになりました。もしひよいさ見て、ちよいさ

でも私の好きさうな人が、もしか鐵砲でうたれでもするような場合があつたら、わたしはいきなり其人を突拔けて、身代りになつてやらうと思ひます。たとひそれがわたしを知つてくれる人であらうがあるまいが、氣狂女が出てきたと思はうがかまひはしません。

わたしはどうしてこんな風に思ふようになつたか、ちつとも熱しないで、ありきたりにかうなつていつた私の心持ちを回顧つて見ませう。心の鏡にうつる姿が、わたしに同情するか、わたしの我儘をいましめるか、それは自分にも分りません。

これたけが前書です。本文は前書よりみじかいうちに書きたくなくなるかも知れませんが、もしそのうちに私が消るようになくなつたらば、殺されたのでも、自害したのでもないおしゆんといふ女の書置きだと見て下さいまし。

山茶花が咲いて、爽やかな渡鳥の聲が小春日和のあしたをおとづれるころ、わたしは何とも名のつけようのない、憂鬱な、氣の引立たない病氣にかゝつてやすんでゐました。

「十九の厄が、輕くつてもおさしになつたのでせう。」なんて、何にも知らない生花の先生などは、見舞にきてさう云つてなぐさめてくれましたが、それにしてもはかばかしくないのが困つたといふように眉を顰めたりしました。

たつたそれだけの事を云はれても、わたしは、何にも知らないのだ、わたしの心持ちは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

誰にも分らないのだと諦めながら、それでも泪組んでゐました。わたしのなやみを、すこしでも察してゐるのは、妹とお母さんと二人ぎりでせう。妹はたつた一つ違ひでゐてゝ私よりずつと老成(ませ)た姉さん氣取りの人でしたから、枕許に他人のゐないときなんぞは、私を納得させようとして、

「いつまでも考へてゐるものぢやありませんよ。おしゆんちやんが機嫌を惡くしてゐるとお母さんが案じてゐて可哀さうですからね。」と云つたり「そんなに氣にするほど嫌な家ではなささうよ、みんな面白い人達ですとさ。」と、其家のことを知つてゐるといふ樣子を見せて、聽きたければ話してあげませうといふ素振りを見せたりしました。

「お君ちやんは、お母さんにたのまれて、わざと聞かせようとするのだ。」と思ふと、わたしは小夜着を額までかぶつて、どんなことがおつても聞くまいとしました。

そんなにするとすぐ熱があがつてきて、苦しいので胸まで掛ものを反退けるときには、ほつと息をして汗ばんだ胸や手をきゆつきゆつと拭くと、妹も氣の毒さうにして額に濡れついた髮をとつてくれたりしてだまつてしまひました。

「困つてしまうね。そんなに氣が進まないのなら、聞いたときにはじめつから嫌だと云つてくれゝば好いに。今更どうすることも出來やしない。今になつて、いつもの病氣だと云

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

へはしません、親がついてゐてさ。」「だけれど、おしゆんちやんも可哀さうね。」

「可哀さうなことはありません。親達が取りきめた、こんないゝ縁談を嫌がるなんて我儘です。親不幸なのですよ。」

うとうとしてゐる枕許で、お母さんとお君ちやんが、わたしに内密のような、態と聞かせるような話をしてゐると、わたしの半眠りの眼からは、熱い泪がだら〳〵流れて、それから目を開いてお母さんの顔をまともに見るまでには、

「だつてお母さんは、私に返事を一言もさせなかつたぢやありませんか。取きめても好いだらうねとおしまひに嚴敷おつしやつたとき、わたしは大變だと思つて一生懸命に、(どうか待つて下さい、お願ひですからわたしの云ふことも聞いて下さい)と云はうとするとそれを察しないお母さんぢやないのに、私に口をきかせないで(昔つから婿の方でとやかく云つても、望まれて、よく探してから申込れた女の方から、見合まですましておいて、嫌だといふことは出來ないものなのですよ。そんなのは男撰みだといはれます。娘子供が男の容貌を好ききらひするといふのは、親の教育がいたらないからだと親まで笑はれます。あすこの家は羽子板のように、幾人嫁入りざかりの娘をならべておくのかと、お前さんの心得ひとつで、妹達まで縁遠いように笑はれます。今更嫌といつても親が許しはしません

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から）と壓石で押しつけるやうに云つて、わたしの泪なんか目にも入れないで、とりつきようのない、（好いだらうね）と念をおすにもあたらないほど壓制だつたくせに、（聞いたときに、嫌ならいやといへば好いに）と、あんな人聞きの好いことを仰しやる。」と怨めしさがいつぱいになりました。お母さんはどんな顔をして、あんなことが云へるのだらうと、心のうちで親を睨めながら目をあいて見ると、口で強く云つても、氣苦勞にしてゐるらしい目の色に、わたしの心はまた弱くなつてしまひました。

其日はまだお晝前で、誰も奥にお客にきてゐさうもないのに、臺所の方で仕出し屋の小僧の聲がしてゐました。ふと氣がつくと、お母さんもお君ちやんも、髮をちやんとさざやの丸髷と島田に好い恰好な結たてでした。わたしの髮といつたらば、先月に島田をほぐしたぎり、それからろくに櫛の齒も入れてはないのです。自分でもすこし氣分の引立つたときには、結んでおいてもらはうかと思はなくはないのですが、それを云立（いひたて）にお床上げでもされてから、何のかのと嫁かなければならない下ごしらへをされては大變だと思つて、それが胸につかへてきて、わたしは起上つた頭をまた枕につけてしまつたりしました。

「こんな好い時候なのに、私も一枚綿入れを着て、好い恰好に髮を結つて、久しぶりでお茶のお稽古にでもゆきたい。私は嫌なことばかりなので厭（あき）てしまつた。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わたしの押附けることの出來ない若い娘心は、健康がもとのようになれば、すぐに嫁られてしまふのを恐れながら、柔らかい日ざしの小春日和の町を、青竹の鼻緒の白木の臺の下駄で歩く、裾さばきの輕さや、久しくつけぬ白粉の、頸の肌ざはりをなつかしく思つたりして、妹の島田の出來ばへのよいのを眺めてゐました。すると、手もちなさそうにしてゐたお君ちやんが、

「姉さんも結つて見なくつて」といひますと、お母さんは急立てるように、

「それが好いよ、それが好いよ。さうすれば熱なんか下つてしまひますよ。そんなにしてゐるから逆上るのでさあね」と元氣な聲をだして「だれでも好いから、お六さんが手があいたら歸してしまはずに、此處へよこしておくれよ。おしゆんちやんが御髮をおあげなさるからつてね」

「島田髷でせう」とお君ちやんがいふと、わたしは何の氣もなしに首をふりました。

「島田さあ、結ふくらゐなら島田でなけりや。」

お母さんはそんなことを云ひながら立かけて、「それでもよかつた、髮でも結ふ氣になつてくれて」と、何だか意味があるらしい口ぶりでした。

髮結ひがすぐに來たのは、お母さんがわたしの氣のかはらないうちにと思つて、他のも

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のは結ひかけにでもしてよこしたのに違ひない早さでした。わたしはほんの雲脂をとつて櫛の齒だけいれて卷いておいてもらはうと思つてゐると、

「何時おあげになつたきりでじたらう、」とお六さんが云ひました。

わたしの胸は、はツとするとどきどきとして耳があーッと鳴つてしまひました。何ともいへぬ腹立しさに一時耳の根まで赤くなつたのを、お六さんは意味をとりちがへたのでせう、

「あら、おからかひまをしたのぢや御座いませんよ。御免ください、なんてわたしは胴忘れなのでせう」と云ひました。

どう挨拶をしてよいのか、腹立しさいまいましさに口をとぢてゐますと、

「それでも今日は御氣分がよくつて結構でございますね。肝心のあなたがおよつていらつしやつちや、親御さまだつて張合がございませんやね」といつたり、「早くお床上げをなさつて、御當日までにみつしり下稽古をさせて下さいまし。いくら結ひつけても、あたくしの腕に捻をかけなくつてはね」と笑ひながら、鏡のなかのわたしの顔をのぞきこんだりしました。

わたしは耳の底へそんな話はいれまいとして、しまいには目をつぶつてしまひました。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

それでも元結をもつ手がわな〳〵顫へだしたので、お六さんも氣がついたか、「お大事なお體なんですから、今日はお髮だけになさつた方がよいでせう。お湯はおよしあそばせよ」といつて歸つてゆきました。

わたしはいきなり、島田のいちの紫の色元結に手をかけて、鋏を持ちなをしました。それもあてつけがましいと思つてまたやめました。末の子が一花もつてきて、薬瓶のせてある、黑塗りのおぼんの上へおいていつた。お會式のときに貰つてゐる、吉野紙でこしらへた山茶花が目につきました。その花は粗末な造花なのに、色なり風情なり生々としてゐるのに、わたしは生てゐながら、自分の云ひたいことの一言すらいえず、こんなみじめな身になるために、今迄生て育つたのかと思ふと自分の心の弱いのがくやしくなつて、髷を揺りこわすかはりに、吉野紙の山茶花の花を引きむしつてしまひました。

「親を憎むのではないけれど」さう言譯をしながらも、其時ばかりは怨みました。それは此前に島田髷に結つたときで、その日より一月ばかり前の袷になりたての時分のことでした。

（未完）

お小夜

原田皐月

五

お小夜は旅の浮いた氣持を錢湯に流して、宵の明星が薄く見え初めた頃停留所に立ち乍ら其處の水菓子屋の苺や夏蜜柑などの灯の光で燃える樣に輝いてるのを眺めてるとやがて電車が止まつた。中は人で一杯で車掌臺までもこぼれて居るのを、お小夜は待つのも煩はしいので鐵棒に手を掛け乍ら片足乘せて振傾くと、其處に立つて居た男の冷笑の下に自分を置いて居た事を見出して跳ね返された樣に降りて了つた。と電車は其儘走つて行つた。

「あの男がとうと私を此處迄落して了つたのだ。親も姉妹もあり乍ら赤の他人で暮さなければならない樣に彼奴がして了つたのだ」

お小夜は引締まつた顏でレールを見つめて居ると不思議にも骨肉に對する愛着の情が犇々と胸に迫つてぢつと立つてる事が出來なくなつた。妹は會社員に嫁いで現に東京に住んで居ると聞いて居る。兩親はもう土になる迄も自分の名などは呼んで呉れ樣とは思はない

けど、せめて一人の妹に丈けでも逢ひたい。逢つて妹丈けにでも自分の經歷が決して自分を人の思ふ程傷けては居ない事を知つて貰ひたい。否其歷事は怎うでもいゝ。怎うでもいい。ほんの時たま昔話でも出來ればもうそれで滿足だ……

お小夜は妹の大きな眼を思ひ出した。怒ると其眼が甚しく凄くなるのでよく泥棒眼などと云合ひした事があつた。まだ小學校に通つて居た妹と詰らない事で爭ひ立てをしたお小夜は、自分の意地を何處迄も通したい一方に殆ど妹と口をきかなかつた。人のいゝ妹は遊びから歸つて來た時など何も彼も忘れて姉に話しかけるのを、片意地のお小夜がぷいと橫を向いて了ふと妹は極りの惡さうな妙に底淋しい笑ひを口の兩端に見せて手持不沙汰に默つて居た其時の顏を、お小夜は今見る樣に判然り思ひ出すと、今直怎うかして逍りたい樣な堪らない氣になつて來た。そして只ぐん〳〵暗い方へ暗い方へと步き出した。只足の向く儘に細い通りを幾つも〳〵曲つては步いて居るうちに妹の事も兩親の事も男の事も考へなくなつて何と云ふ事なしに重い塊りが心臟を押上げて來る樣な氣持丈け殘つて居た。

お小夜は藥屋の明るい店先を曲らうとすると、行手の暗い方から、

「あらお小夜さんぢやなくつて?」

呼び止めた人はセルの單衣に半巾帶を〆めた束髮の女であつた。

「まあ芳江さん」
「何を今時分其麼に考へ込んで歩いてるの。然も此麼處を」
「此處は何處？　私電車を待つて居たんだつたのに彼麼野郎に合つたもんだから……今退けるの」
「誰に逢つたの」
「關よつ」お小夜は投げ付ける樣に云ふと、
「彼奴まだ東京にぶら付いてるのね。一體何してるんだらう。いゝ加減死んぢまへばいゝのに」二人は肩を並べて步いた。
芳江の兄と關とが友達同志なので芳江も國に居た頃よく逢つて知つて居た。けれどお互に東京に出てからは芳江は兄と別に住んで居たし、芳江が學校を出た頃は兄は任地へ行つて東京には居なかつたので逢ふ事なぞは殆どなかつた。それが一昨年芳江が新聞社の方へ這入つて間もなくであつた。突然關が社に尋ねて來て自分の結婚した女が淺草の斯う云ふ處に店を張つて居るが、怎うせ腸の腐り果てた女に用はないけど、多少でも敎育を受けた女が虛榮の爲に婦德を破つて平氣で居ると云ふ事は風敎上重大問題だし、一般の女の見せしめにも筆誅を與へてくれと云ふ樣な話を持つて來た事があつた。芳江は關がまだ專門學

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

校入學の準備中にもう妻帯したと云ふ事も、其妻君が自分の三級下の生徒で其頃まだ女學校を卒業して居なかつたと云ふ事も兄から聞いて知つては居たが、元より級が大變に下なのでお小夜の事もあの人かもしれない位の外見當は付いて居なかつた。芳江は閒を歸してからも二人の中に如何か蟠りのあるらしいのを考へ乍ら、淺草と云ふ事から自分の同窓を其處へ導いた不思議な謎を解く事も興味深い事に思はれて、早速芳江は其方を尋ねたのであつた。芳江は其處の框へ手を着いた潰しに無地お召の羽織を引かけた眼の凉しい口の締つたお小夜を見ると直に昔の幼顏が思ひ出されたのであつた。

「まあ怎して此麽處へ」

と云つた切りお小夜は笑つて許り居て話さなかつた。芳江は相手が窮屈にならない樣にと務めて碎け乍ら閒の來たのやら、餘り馬鹿氣て居るので直に追歸して了つた事など色々話しても、お小夜は只笑つて居る丈けで矢張餘り口を開かなかつた。

「お恥かしいですけど私などは愡うせ人樣のお仲間入りの出來る身ぢやなし」

此麽事を繰返して居た。堅つ苦しい人の中で堅つ苦しい話許りに馴れた芳江は、斯うした仇なお小夜から流れる婆娑つ氣の多い空氣に吸ひ込まれては、ちよい〳〵お小夜と逢つて居た。お小夜も日の中なら芳江の來るのを眞から喜んで向へた。二人丈けで郊外へ遊び

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に出かけたりもした。
芳江がよく關の話を持ち出すと、
「あんな意氣地のない奴見て居られやしない」
と云ひ〳〵した。芳江が、
「それでも始めは貴方だつて戀して居たんぢやないの」と云ふと、
「だつて十七やそこらで何が分るものですか、ですから私は自分で失敗つたから自分で責任を負つてるぢやありませんか」と云つて居た。
關は戸籍を握つてると云ふ强みから何かに邪魔を入れるのを、お小夜は其都度金で胡麻化して居た樣だつたが、とうと芳江と芳江の兄が中に這入つて漸々籍丈けは拔く事が出來たのであつた。其後も關はお小夜の直隣の家などで遊び乍らお小夜の監視をして居たりするので、是れには氣味惡がつて居た。
「ね私や今つく〴〵考へたのよ。彼奴のお蔭で私が斯うなつたと云ふよりや、私は何の道斯うなる女だつたのだと思つたの」
「いやに今夜は泌みりしてるのね。夜遲かつたらお家の方に惡いんぢやないの」
芳江は急込んで馳けて來た電車を見送り乍らお小夜に云ふと、お小夜は急に陽氣に笑ひ

だした。

「私やもう彼處に居ないのよ」

そしてお小夜は芳江の妙に探る樣な顏を見ると、も一度吹き出して了つた。

「芳江さんも飽きつぽい女だつて云ひたいんでせう？　だけど亭主の味ならもう關で懲りてる私ぢやありませんか。男つ位嫌やな處と好い處を持つてるものはありやしない。自分の男となりや惡い處でも嫌ひな處でも自分のものにしなけりやならないでせう。私には眞平だは、そんな事は」

お小夜は茶化した樣な顏を芳江から離さなかつた。

空には星が綺麗に散ばつて居た。芳江はちら〳〵動いてる星の光を仰ぎ乍ら、

「男が皆關ぢやないでせう」

「そりやさうですがね。只關よりや惡い處が少いか多いかの違いよ」

「オヽ……人間にさう贅澤云つたつて仕方がないは」

「仕方がない？」

「仕方がないは」

「あつてよ」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「何處に?」
「あのね。斯うするのよ。大勢の男を束にして其處からいゝ處許り皆引抜くの。さうすると立派な一人が出來上つてよ」
「成程凄いはッ」
其處は明るい酒場の前だつた。そして何處か底の方にをかしさを潜ませた樣な二人の顏が其處の萩戸の中に狹まれた鏡の中に照ると、芳江はお小夜に皮肉な眼を向け乍らくつと笑つた。
「私はまだ夕御飯前なのよ」
と云ふとお小夜は鏡の扉の中へ這入つて行つた。
外のぴか〳〵してる割合に中はまるで鐵道の荷物取扱所と云つた風に。巾の狹い頑丈な臺が幾側にも据ゑられて其前に小さな腰掛けがちよく〳〵置かれてある單簡さに二人は思はず顏を見合せた。お小夜はビールを命じてから、
「何かハイカラのお酒を飲まなくつて?」
遠慮もなく大きな聲で云ふと二組の書生が一齊に口を噤むと二人の方に視線を向けた。
そしてお小夜の美貌に征服された樣に白い目を向ける丈けで急に靜かになつたのが芳江も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何となく快く思はれたので、
「何？アブサンて飲んだ事あつて？」
「いゝえ、それを飲みませう」
芳江はちよい〳〵此方を盗み見る樣にして囁いてる書生達を見乍ら小さな聲で、
「男が五人居てよ。まだ束には不束」
「さあ當つて見なけりや」
「どうぞお遠慮なく」
二人はぷつと失笑した。其處へ小さなアブサンのコップと一緒に持つて來たカッレッのお皿の上に割箸が載つて居るので二人は又笑つた。
「これで食べるの。馬鹿にしてるは」
「御親切に肉が切つてあつてよ」
「打壞しぢやないの？　出ませう芳江さん」
お小夜は眉の間に不快の色を見せ乍らさつさと勘定を濟ますと一箸もつけずに出て了つた。芳江はお小夜の置き忘れた傘を持つて出て來ると、
「こん度いゝ處を見付けませう。束なんか居ない處がいゝは」

快い醉の上つた二人の顏に夜風が氣持よく吹いた。何處か緣日があるらしく行手の空がぼうと明るくぼかされて居た。芳江は、

「だつて東が居なくちやお小夜さんの世は暗ぢやないの」

「なんかつて芳江さんだつて同じ事でせう。もし芳江さんが眞から底から獨りの男に滿足する事があつたら、私や貴方の片方の眼玉は硝子張りだと思ふは」

お小夜は始めて味つた火酒の醉心地に氣も體も輕くなつて、大道の眞中を自分一人のもゝ樣に步いた。そして二人とも無遠慮に笑つたり話したりしてるので行く人を振り返らすのであつた。

「片目硝子でいゝ位なら何にも男なんか好かなくたつて自分獨で結構の筈だは」

お小夜は獨り喋り續けた。

「そりや自分獨りで澤山なのよ。只其自分獨が相手の男に突當つて見ないと中々分らないんぢやありませんか。結局は自分獨りよ。」

「さうでせう？　だから大勢に打突かれば餘計いゝ譯ぢやないの。怎んな男だつてピンからキリ迄女の好く樣にや出來て居なくつてよ。私芳江さんはほんとに好きよ。些つとも高尙がつて居ないから。嫌やに學者振つて許り居た處で女は女ぢやないの男が好きな癖に顏許

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りで嘘を云はうたつてねえ、さうは行きやしないは。私は矢張り關の野郎のお蔭で仕合せなのよ。親や妹に虫だ獸だと云はれた處で私程誰も女に生れた味を知りやしないぢやないの」
「貴方も親の云ふ事さへ聞いてりや今頃は二三人のおつ母さんだはね」
「さうね。生きてるんだか死んでるんだが忘れて居るうちにお墓の前迄行つちまつて、氣の付いた時は骨になつたなんか人笑はせだは」
お小夜は其處の小さな洋食店を見つけると、
「あゝお腹が空いた」
と云ひ乍ら二階へあがつて行つた。
日本間を造りかへたので天井は低い家であつたが一間々々區切つてあるのでお小夜は緩り腰を下すとウヰスキーがいゝと云つた。
芳江はコップにさしたセロクを見乍らこの人も無事に行つて居たら洋酒などの味も知らずに子を育てゝ行つたかもしれないなどゝ思つて居ると、
「私の妹ももう兒供が出來たかもしれなくてね」
「逢いたい?」
「女は割が惡いは。お竈の蝶と同じで兒供が出來たらもう女の一生もお終ひなんだもの。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

永生きがしたけりや小供なんか產まない事つたわね」

「でも育てゝる人は其麼もんぢやないでせう。兒供も育つて行けば自分も一緒に育つて行くんだから」

「さう思へる人は無事よ。私は人の事でもさうは思はないんだから。人間は自分のいゝ樣にするのが一等いゝ事なんだは」

お小夜は飮み乾したコップを芳江の前に置くと傍に立つてる小女に、

「ねえ、さうでせう」

と何の事やら分らない事を云つて笑つて居た。

「貴方も今に變つてよ。ほんとのいゝ人に逢ふと」

「さうは行かなくてよ。私の眼は兩方生きてるんだから。私やいつもさう云ふのよ。あばたは啞に見えやしないつて」

「さうぢやないのよ。あばたはあばたなりによく見えるのよ。貴方にだつて其麼時は來るに違いないは」

「私は全く水性つて譯ぢやないのよ」

何か考へて居たお小夜は眞顏に云ひ乍ら急に自分の眞面目さがをかしくなつて失笑して

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

了つた。

六

二人が外へ出た時は餘り早くなかつた。

「今日は嬉しくて仕樣がないは。關に逢つたのが嬉しくなつちやつた。彼奴のお蔭で私も幸だし。ね芳江さん世の中は自分の身に降つて湧いたものが仕合せなのね。一寸は不仕合せの樣に見えても矢張りさうぢやないのね。今夜はつく〴〵嬉しいは」

「其麽にして嬉しがつて計り毎日居たら何日待合が出來るかしれたもんぢやないは」

「嬉しがつてりや結構ぢやないの。金が失くなれば又何處かへ藻繰り込む許りよ。其内に又出來るから。私達は男の金を使つてやる樣に出來てるんだから」

芳江はこの美貌がこの女を生かしも殺しもするのだと思つてお小夜の顏を覗くと、

「何を見るの」

「餘り綺麗だから」

「オホヽヽヽこの鼻が一分低くてこの口が一分廣がつてたら、私にも斯うしたお天頭樣は照らなかつたかもしれないと思ふとをかしいはね」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お小夜は芳江が歸りを案じて居るのも構はず、カンテラの油煙や人のいきれの吸呼苦しい迄もや付く縁日の中へ這入つて行つた。仕方なしに付いて行つた芳江は其處の玩具屋の飛んだり跳ねたりの玩具を面白さうに眺めて居ると、お小夜は芳江の耳に何か囁いて急いで行つた。そして前の二人連れの男女の間へ割り込むといきなり男の手を引いてずん〳〵歩き出したので、飽氣に取られた樣な役者らしい連れの女を芳江は氣の毒さうに眺めて居ると、二三間行つてから男の手を離して、お小夜は連れの女に笑顔を浴せながら獨りで歩いて行つた。そして後から追付いた芳江に、

「面白かつて？」

「女の人が呆然りして居てよ可愛さうに。何してる男？」

「知るもんですか。醉ふと恁麽惡い事がしたくて困つて了ふ」

「貴方まあ知らないの？」

芳江の呆れてる顏を見てお小夜は氣持よささうに笑つて居た。

「もう嫌や貴方と一緒に歩くのは」

芳江が怒つた樣に云つてすた〳〵先へ行くとお小夜は猶更らげら〳〵笑ふのだつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白刄の跡

佐藤欽子

この月に入つてからも烈しい斜降りがある、かと思へばまた細かい霧雨がしと〳〵と降り續ける。そして墓地の夜のやうな陰氣臭い日が續く、そうかと思へば厭やに蒸し〳〵して黄い塵埃の見える雲の切れ目から燒きつけるやうに日がのぞき込む日もあつた。こうした定まらない氣温は榮の病氣に良くなかつた。殊に此二三日の暑さには健康な人でさへ堪え難い倦怠と疲勞を感せさす程であるから切角持ち返しかけた彼れにはその病狀が再び暗い處へ引き摺り込まれそうに感じられたのである。そして發作前後に襲ひ來る烈しいめまひと動悸と、異常な體温から來る疲勞にすつかり痩せが見えた。そこで彼女は自分が精神病であると思つてた。薔薇色に輝く可き肌も青白く、愛くるしい目も陰欝に、弱々しく細い髮の毛を持つた彼女は誰れが見ても病身らしかつた。十八や十九の年頃をあどけなく肥る事も出來ず、暗い影を運命的に脊負はせられて其日其日を生き延ひて行く樣に見えた。然し榮の病氣は常習的のものでなかつた。一年中に一度や二度は必ず斯うした病的發作が襲つた。それも大概二ヶ月もすれば拭はれる樣に全快したり、又時には僅々二十日内外で

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大した發作もなく癒つて仕舞ふ事もあつた。彼女の弱い腦には多數の醜い影が蛆虫のやうにウヨ／＼と巢くつて居た。形のある樣な無い樣な、色にしたら黑であろうと思はれる。それが時折り特種の命を持つたかの如く能動的に彼女の精神狀態を異常にした。其んな時彼れの氣分は底ひも知れぬ千仞の谷にでも沈む樣に、意識が朦朧となる。萠芽のある時はまづ身體に變調を來して腦味噌が拔き取られたかの如く妙な空虛を感じ、頭の一部が燒き火箸でしごかれた後の樣に激烈な痛みを感ずる事がある。又身體中の血行が一時に止り、死人の如く心底から冷たくなつたりするかと思へば、動悸が急に烈しく息つまる苦しさで居たゝまらぬ樣になる。そして火の樣に身體が燃えほてつて瞼の裏が熱く、目を開いて物の色が解らぬ事もあつた。かうした時彼女は終日濕つぽく暗い一室に閉じ籠つて氷嚢を頭に當てがつたきり身動きもせぬ。又或時は絕えず襲ひ來る異樣な影に附きまとはれて、ひどく苦しんだり、胸に當てた自分の手が三本あると悲しげにさめ／＼と泣く事さへあつた。何時であつたか、見舞ひに來た從姉の不注意から、榮の病室に脫ぎ捨てた丸帶が、ずた／＼に鋏を入れられたのを翌日見た事などあつた。然しそんな風の發作は珍らしかつた。普通は譯もなく恐ろしいと云ひ、淋しいと云つて、他愛もなく泣き入る位のものであつた。よほど病狀の烈しい時の外、自分のことは自分一人で仕末をつけた。それは長い間の異常

な自分の身體を取り扱つて其容體に慣れて居たせいもあろうが。一つには醜い病狀を人に見られる事を非常に恐れたからであつた。

榮は常から淋しい孤獨感の强い女だ。殊に病氣の時にそれが烈しい、家の者と一言も口をきかず、たゞ一人で居る事を　み欲した。多くの人を憎み厭ひ同時に自分も憎み厭らはれて居るものとのみ信じた。斯ふして彼女の世界はいつも暗い、明るい人生を離れて暗くしめつぽい道を一人辿り行く樣な賴りない自分を感じて居た。彼女には元より家族もあつた。友達もあつた。女も男も其周圍を取り卷いて居た、それ等多くの人々の中には「わが戀人よ」と人なつかしくも呼びたい氣のする者もないではなかつたが其何れにも自分を置く氣持ちにはなれなかつた。彼女は常に思つた「たゞ一人でいゝ、眞實に自分を愛し、自分を知つてくれる人が欲しい、たゞ一人欲しい、若しそんな人が自分の世の中に一人ゐたならば自分はどんなに幸福だろうか、若しそんな人が求め得られたならば此心の惱みは如那に快く癒されるであろうか、自分は奈何にしても其れを求めなければならぬ」とかうした果敢ない　望はいつも不可能の事として破壞されて仕舞つた。「自分は幻影を見て居るのだ、自分はやつぱり一人だ、世の中でたゞ一人生きられるまで生きて行く外仕方がないの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

だ、たとへ淋しくとも悲しくとも自分の賴りない生命と暗い運命とを凝視めて死に際まで生き延びて行くより他に仕方がない。此世の中に眞實自分を理解し、自分の思ふ事を思ひ、自分の生命を生命と思つてくれる人が果して何人あらう。自分には親もある、兄弟もある、彼れ等は自分を親切にしてくれる、勞はつてくれる、然し彼れ等の中に誰れ一人として自分の此苦惱と苦悶と悲痛を共になめてくれ、徹底的に同感同情してくれる者はない。まして自分の悲痛な運命の前に死んでくれる者はない。それは元より自分ばかりでないのだ、世の中の人のすべてが斯那悲しい生き方をして居るのだ。だから自分は諦らめねばらぬ。自分以外に自分と寸分異はぬ人の無い限り、それは到底不可能な事だ。あゝもう一人の自分、もう一人の自分、それは此自分の淋しい影を世界中に引いて殘りなく探し歩いたとて見當るものではない」こう思つて淋しく諦らめても見た。では果して眞實自分一人で生き樣とする强盛な明確な自意識が彼女にあつたのであらうか。それは彼女自身にも疑問であつた。彼女がなる可く孤獨に、周圍から自分を引き離そうとし、離れて行くには他に原因があつた。彼女は自分の病氣を悲しむと同時にそれを人に知られるのを非常に怖れた。醜い自分を悟られまい、知られまいとする臆病な心持ちが絕えず鈍く働いて居たのである。彼女は誰れに對しても其心持ちを忘れなかつた。ひどく人に恐怖を抱いてゐたのはそれであつ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。殊に彼女自身の心に喰ひ入つて來やうとする樣な或る交渉を感ずる人々には一層烈しい恐れを抱いたのも凡て斯うした氣持ちからであつた。だから可成り親しい間柄の者でも榮にそんな病的心理がある事に氣もつかない。たゞ溫和な、靜粛な女としてのみ知つて居られた、かくして彼女は巧みに自分の性格の半面を被ひ隱して居たが長い間の習慣上それが苦痛でもなければ不愉快な事でもなかつた。何日からともなく、何故ともなく、隱さなければならないものゝ樣に思つて居た。それは或意味で立派な罪惡かも知れぬが始終取り詰めた心持ちの彼女には罪だと思ひかへす暇もなかつた。こんな事から不知々々彼女自ら自分の境遇を孤獨的な淋しいものにしたのである。かうして兎もすれば何者にか奪い取られそうな自身の生命を保持せんとする念、或る不可抗的な力に對する苦しい戰鬪が彼女の暗い心にしきりなく續けられて居たのである。

何時ころからなつたものか、彼女は知らなかつた。が決して後天的の者でなく凡て宿命的に作られて居る樣な氣持ちもあつた。榮はそれを悲しくも思ひ又諦らめ安くも感じた、彼女はよく子供の時を思ひ返す事がある。一人々々靜かに古い記憶を呼び起して居るうち今經驗して居る精神上の異常な事實を見出す事が出來た、榮は子供の頃から他の兄弟とは

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

異つてひよわで青い顔して病氣ばかりする子供であつた。其頃未だ生きて居た大祖母の膝に抱かれてむづかりつつ育てられたのを覺えて居る。これは榮に一番古い記憶であつた。夏の或る夕、彼女は叔母のおゆかさんに連れられて、つい近所の寺の門前で石垣を數へて遊んでた。村の子供等はほこりで白い足に小さな藁草履を引かけて、元氣の良い顏でしきりに馳せ廻つてた。其中の五六人が燕の巣のある大きな軒下で蝙蝠ごつこを初めた。頰の赤いはしつこそうな子が蝙蝠の役に當つたらしく、小さな子供の圍から逃れて墓陰に隱れた。殘つた子供等は後からそれを追つかけ廻す、紐を輪の樣に結んだのを持つて居た。輪なに掛つた蝙蝠が幾人となく榮の前を通つた。子供等は蝙蝠のまわりをグル〳〵取り卷いて大げさに鬨の聲を上げた。一方女の子等は手を繫いでそれを入れる籠を作つた。面白くて堪らぬと云ふ風に、それでも半ば憶病氣に、石垣のそばに小さく跼くまつて見入つてた。「コーモリ來い、コーモリ來い」と子供等が樂しそうにはやし立てる聲は後の山にまで響いた。聲を聞きつけた他の子供等が又一層多く、ゾロ〳〵と夕暮れの街道に集つた。其時蝙蝠の逃げ場を見失なつた子が息せき切つて彼女の前に現はれた。榮は、はつとして若い叔母の手に抱かれ樣とした、が、どうしたものか、おゆかさんはもう其處に居らなかつた。グル〳〵慄へて恐ろしく勢込んでる子供の動作を見守つた。子供はそれを見つけていきな

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り彼女の肩先に輪をかけ「可愛いコーモリヤめんこいコーモリヤー」とはやし立てた。他の子供の一人がそれを手傳いに來たらしかつた。恐ろしさに榮は青い菜の樣な顏して立ちすくんだ。身體は木の葉の樣にワナ〳〵と慄へてゐた。其夜から烈しい熱病を病んだ。熱に浮かされた彼女は長い間物の怪に魅せられたもの丶樣に、手足をもがいて泣いた。祖母はつきものがしたのだと云つて水晶山の行者に賴んで魔を拂つてもらつたが、なか〳〵修まらなかつた。「お前の病氣はそれからだ」と母はよく云つた。そう云はれるとそうかとも思はれた。子供の時から他の兄姉の樣に遊び廻る事もなく、何時も温和なしく、乳母が作る紙雛樣などを弄んでゐるのがならひであつた。此子は可愛そうだが長生きはしない」と祖母がよく云つた。母もひよわな榮を始終氣苦勞に思つて居るらしかつた。

榮がまだ田舍に居た時の事であつた。其頃は美和子と云ふ總領の姉もまだ生きて居た。丁度五月頃の樣に雨のふり續く日であつた。野原か山の他に遊び場を持たぬ田舍の子供等は此那日にはきつと芝居の眞似などして遊んだものだつた。兄は芝居をするのだと云つて其日も同じ年頃の子供を連れて來た。不思議なものでも見る樣な心持ちで兄や姉と一しよに暗い土藏の中へ這入つた。兄はふくらんだ懷から蠟燭を握み出して其處等中にともした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

他の子供等は何かの時に使はれたらしい摺り模様のある古い呉坐などを引き出して見物席を造らへた。姉は「くも井」と云ふ藥の樣に丸まつた白粉を手に解いて顏中塗り立てた。かうして芝居が初まつた。兄姉たちが奈那心算りの芝居をしたものか榮には解らなかつたが兄は澁紙を綴じ合せた鎧の樣なものを着け、條竹を刀の代りに五六本もさして居た。他の子供達も同じ風をして居た。其中で姉ばかりは模樣のある長い着物を引き摺り、人形の樣に美くしい顏をして居た。常にもあまり人足の入らぬ土藏の中は廢墟の如くじめじめと陰氣臭かつた。其土藏の中で子供等は隱慘な人殺しの眞似をした。兄は姉の赤い衿の見える胸元へのしかゝつて譯の解らぬ言を云ひ乍ら喉に刀物を當てがつた。「何と云ふ厭やな事をするのだらう」と思ひながら、それでも凝然と、吸ひ着けられた樣に氣味惡い動作に目を落した。榮の身體は動かなくなつた。唇が烈しく痙攣して、意識がぼんやりして來た。逃げる心算りか、夢中で立ち上つた。然し重い土藏の戸は二重に内から閉められてあつた。苦しさに聲も立て得ず悶へた。其瞬間暗を泳ぐいもりの腹の樣に赤い蠟燭の炎が彼れの目を強く射つた。榮は思はず大聲を上げた。そして強く叩きつける樣に土面を踏んだ處だが其後の事はちつとも知らなかつた。

彼女の良心は又非常に敏感であつた。内氣で、小膽で、悪戯一つ仕得なかつた、兄姉の間に口爭ひをされるのさへ堪え難い程苦痛であつた。自分の正しくないのを知る時昏倒する樣な氣持ちになるのが例であつた。

確か七歳の頃だつたと思ふ。或日日當り良い縁端で棠は一人つくねんとしてゐた。目の前に竹すだれが靜かに下つてゐたが暫時するとすだれの竹が吐く妖氣で身體のまはりがひつそり靜まり返るのを感じた。その怪異な感に驚いて一心にそれを見守る瞬間彼女の目に映る四角い竹すだれが不思議に圓く細く長く菱形に、果てはそれ等の圓や線がぐる〳〵入り亂れて形なく消え失せた。すると又細くしごいた竹の節のみが搖れて蛇の如くぺろ〳〵火を吐く、火は赤に黃に白に七色に燃えてゐたが、やがてぱつと消えたと思ふと今度はめら〳〵とすだれに燃えひろがる。燒け落ちるとそこには靑い灰ばかりがうづだかくたまる。と灰がむく〳〵と動き出して魚のやうに泳ぎ出すので「おや！」と驚きのあまりそれを眺め、感じてる自分自身が今度は如何にも奇怪な生き者に思へた。やがて彼女は此怪異と不安に、身體を壓し殺される苦しみを感じた。かうして目に映る物の凡てが形あるが如く又無きが如く、それを握まうとすると胸が壓し詰まつて、腦が混亂し、目の上が急に燒ける

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

樣に思つた。かうした症狀は今でも一人居る時によくあるのだが注意が一點に集注して何か凝視してゐる場合にはきつと起るのである。烈しい時には自分自身の存在すら疑つた。こんな時彼女は自分の呼吸をさへ怪しく感じた。榮は暗い影を引いた、かうした自分の過去を哀れむかの樣に時々そんな事を思ひ出して自分を悲しんだ。

久しぶりで落ち着いて、机の前に坐た。小窓を開けると雨に濡れた空氣が疲れた神經をひやりと心地よく刺した。か細い雨が忍びやかに降つて、紫陽花の花びらにたまつた雨滴が思ひ餘つたらしく溢れた。物珍らしそうにみづ〳〵しいこの外景を眺めた。そうして彼女の重苦しい心は喘息から目醒めて微笑んだ。初めて新らしい氣持ちになれた。逆上した惡血が、抑し下げられて赤く美しい血が此優さしい身體中を廻るかとも感じられた。四日も憂惱した後には良く斯那すが〳〵しい氣持ちになる事があつた。勿論長つゞきするものでないのはよく知つてた。暫時病氣をしてる間に家の者とすつかり離れて仕舞た樣な氣がした。病氣の時には母や兄とめつたに口をきかなかつた。苦しんでる間は相手にされないのが反つて良い樣なもの丶かうした平靜な時には堪らなく不滿で淋しい。榮は今日も久し振りで家の者と一しよに朝の食事

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をした。常と少しも變らぬ機嫌で子供等の世話などをした。二三日前から來てゐる小女が彼女の病氣に就いて外の下女から聞きでもしたものか今は平常と異らぬ榮の動作を不思議そうにきよと〳〵眺めた。物を尋ねても返事もせずに榮の顔から目を離さない。それが可笑くもあり、又癪にも觸るのであつた。彼女は思ひ出して黑塗りの小切れの箱を取り出した。色々の切れがギッシリ詰まつてる中から赤い縮緬を取り出して小さな妹に遣る心算りで人形の着物を裁つた。白い手が器用に動いて、小一時間もすると人形の着物が出來上つた。それから小さな着物に似合ふ帶を一すじくけ上げた。ホッとする程な輕い疲れを覺えたが少しでも仕事の出來る自分を見るのが堪らなくうれしかつた。榮は靜かに雨の滴りを聞きながら斯那時妹でも來てくれれば善いがと考へたが誰れも來てはくれなかつた。榮はふと濕めやかな雨の中を歩いて見度い氣持ちで家を出た。外は暗かつた。霧雨の中に赤く慓へてる町の燈を後にして靜かな高臺の方へ歩いた。煉瓦塀の長い鐵工場の裏を拔けて×坂を上る迄は未だ汚ない、場末の古道具屋や紙漉屋等が見えたが坂の上からは靜かな氣持ちの屋敷町だつた。威かめしい石門や瀟洒な冠木門のある家等が何軒も並んでた。人通りの無い町を一人歩いてるのが何とも云へず良い事に思へた。細い傘の柄で調子を取り乍ら小さく口笛を吹きつゝ歩いた。三四丁も行つたと思ふころ大きな古い寺があつた。其處

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

から道が別れて右に曲れば鐵工場の表門の方へ其まゝ眞直に行けばずつと效外の方に出られる樣になつて居た。榮は暫時躊躇ふ樣だつたが右へは曲らずに其儘往來から大分奥まつた寺の大きな門を入つた。其寺は榮が子供の時分度々遊びに行つた事があるので良く知つてゐる住職の知諄さんは丈の高い立派な坊さんだつた。其お梵妻さんの連れ子だと云ふ脊踞の女の子と彼女は知り合ひだつた。榮はあどけない昔の事を懷しく思ひ乍ら物寂びた境内を眺めた。何時の間にか空は美しく晴れて雨はすつかり止んで居た。正面が本堂で、左に花崗石の敷石を行くと古い觀音堂があつた。そばには可成り大きな池の水の色が青く光つてた。榮は忍びやかに、ぬかるみを踏みながら池の端へ行つて踞んだ。周圍はひつそりとして土の下を這ふ虫の歩みまで聞えそうに思へた。榮は大きな幹に身體を持ちかけて滑めらかな水の色を飽かず眺めた。暫時すると青臭い古池の臭ひがぷんと鼻をついて來た。すると彼女は子供の時の或小さな出來事を思ひ出した。十一か二のころだと覺えて居る。榮は近所の子供や妹達を連れて寺に遊んだ、池に厚い氷が張てゐたから冬の寒い時分らしかつた。霜柱を踏み乍ら木の實を拾ひ合つてた彼女は其池の氷の下に鼠色した犬か猫の死體を見出した。半ば浮いた樣に半ば沈んだ樣に寒く縮つてゐる其醜い屍體を見た彼女はゾッとして目を掩ふた。他の男の子達はそれを見つけては其儘に置かれぬと云つた風に長い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

捧切れを持つてそれをつつき初めた。男の子は面白そうに笑つた。一度顏をそむけた榮はどうしたものか急に慘忍な氣持ちになつて男の子と一所にそれを押し轉がしたり、引き上げたりして見た。裂けた腹の中から豆腐のカラの樣な物が澤山にふやけ出したので氣持ち惡くなつて止めたのを今でも時々思ひ出しては悔いる事があつた。が今夜の池はそんな不浄なものではなかつた。水面はビロードを延べたやうに其上には星が一つ光を落さして居た。何日かの犬の骨はどうなつたものか、未だに此池の奥深く殘つてるのか、それとも腐つてなくなつたか、且つて此池の中に彼んな小さな出來事があつた、と云ふ事さへ思ひ出してやらなければ池自身にも忘れられて仕舞つた樣に冷たく靜まりかへつて居た。彼女は水に一種の恐怖を持つて居た。人の魂を、そそのかす樣な、おびき出す樣な、一種の不可思議な水の力を恐れずには居られなかつた。一人、人氣もない寺院の池畔に蹈つて居ると思ふと急にワク〳〵として來る。物凄い淋しさに襲はれた彼女は發作前の樣な沈痛な險はしい目を凝然と水の上に置いた。

平靜な容體が可成長く續いた。青白い顏や色ざめた唇にも次第に血の色が冴えて來た。「病氣はもう去つて仕まつた」と云ふ確信が榮の心を晴れ〳〵と嬉しいものにした。然

し斯那時でも凡てを忘れて腦の隅から隅まで掃き清められた時の樣な氣持ちにはなれなかつた。少しでも長く平安な氣分の續く時は後の容體が懸念された。それが落ち着きかけた神經を時々痛めたりした。こうして居る間にも暗い影が壓しつけて來る樣に感じられて焦々する事があつた。そして今度こそは病氣が自分を臺無しにして仕舞ふのではないかと考へたりする。「自分は一瞬間だつて安靜な心持ちになつて居る事は許されない身體なのだ。今にも大きな力がおし來つて自分を卷き込んで仕舞ふかも知れぬ。私は絶えずそれを懸念し、それを恐れなければならない、自分は夜から日に續く烈しい身心の苦悶に打ち勝つて何處まで行く事が出來るのか」と思ふと堪らなく情なかつた。「自分の生活は何時も〳〵暗闇の中にあるのだ。一時でも油斷は出來ない、少しでも隙があつてはならぬ。苦しみの中にも苦しみを見つけ出して行かなければならない。其中に自分の肉體は次第に亡びて行くのだろう。血も肉も靈も凡て濕ひあるものは皆、すすり取られて死んで行く日が來るのだろう」榮は何時もかうした絶望的な心持ちを持つてゐた。そして時には痛々しくも呪はれた自分の生を自ら呪ふ事もあつた。彼れは今も淋しい氣持ちになつて美くしく燃え上つた唇を強く噛んだ。銀線の樣な細雨が降つたり、父が飼ひ馴らしたカナリヤが鳴いては番のエゴヤを溢すのが悲しかつた。榮は縁先きに青く垂れて居るすだれの隙き間から淡く〳〵

何處までも延びて行きそうな空を飽かず見入つたりした。また胸に當てた指をほどいて懐手のまゝ片手で衿元を開いた。透き通る程白い胸の肉附きを喰ひ入る樣に眺めた。乳首のまわりを血管が細く取り卷いたり、左の乳首から右の肩先まで太い一筋の靜脈が這つて居るのも薄い肌から透いて見えた。彼女は幾筋もの血管の中に流れてる赤い血の色を思ふた。そして其無數の細脈を毒々しく迸流する氣狂ひの血が自分の生命や運命を呪ふて居るのだと思ふと又新たな腹だゝしさを覺えた。其時チラと榮の興奮した目に映つたものがあつた。それを傷あとだと知つた時彼女は名狀し難い厭やな氣持ちになつた。榮は三年前フトした事から恐ろしくも自殺を畫てた事があつた。自分の精神病なることを明確に知つたのは其後だつた。其時分でも年に一度や二度はきつと輕い發作が見舞て來た。美くしく結び上げた前髮の毛をプッツリ切つたり、又折角縫ひ上げた緋の長襦袢をすつかり解いて仕舞つたりした。丁度其ころ榮の母方の叔母に當る人に精神病者があつた。不幸な叔母は土藏に隣つた暗い一室に壓し籠められて年中泣いたり笑たりして居た。時には美くしい目を釣り上げて夢中に荒れ狂ふ事もあつた。長い髮の毛をふり亂した其青い顏が銹の樣に榮の目にこびり附いて離れなかつた。榮は自分も今にあんなに成るのだと思てひた泣きに泣いた。何日かは自分もあゝして發狂する時が來るのだと云ふ心持ちが絶えず彼女を苦しめ、そして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

其疑念は遂に烈しい強迫觀念となつて彼女を惱ました。柴が小さな短刀で自殺を謀たのは其病狀が極度に達した時であつた。別に原因とてはなかつた。たゞ其强迫觀念から來る烈しい苦悶と恐怖から逃れ樣とする心から殆んど夢中にやつた事だつた。それは果し得なかつた。彼女は今淋しい心持ちでそれをながめた。そして悔いた。「彼の時何故死ななかつた。自分は三年前からの苦悶をこうして今になめて居るのではないか、自分の此生活に何の光がある、希望がある、死ねばいゝのに」とつぶやいたとき冷めたい笑ひが彼女の顏一ぱいにひらめいた。彼女は指先きで紫色に筋を引いた傷あとを何度と云ふことなしなでた。顏は痙攣つて目には淚がたまつて居た。

うづ

荒木滋子

『お見合(みあひ)』から歸つて來た米子は、只ニコ〳〵と笑つてゐた。而して初めて着た長い袂の振りを幾度か鏡の前に寫しに行つた。姉の芳子が辛く苦心して塗けて遣つた厚化粧を、ソッと白紙に壓えて見たりして、容易くは晴着を替へようともしなかつた。

『能くお似合に成りましたよ、好いお召でしたね』女中のそよは恁う云つて賞めた。平素なら直ぐに『何をうぢや〳〵』と叱る母親も同じやうに莞爾して眺めてゐた。

この縁談が芳子の耳に這入つたのは、もう三月も以前の事である。芳子は人知れず、先方の郷里の事を問ひ合せたり、人物を探つて見たりして、思ふやうな傳手の無いのを齒痒く思つてゐた。が、家の者は誰も知らなかつた。當人の米子すらも、數日前迄知らずに居たのである。只、此頃自分を望んで來た者が一人二人は母親の手許に在る位の朧な推察が仄か乍ら感じられるに過ぎないらしかつた。豈夫(まさか)にそれが昨日今日實現されると云ふ事は思ひ懸けなかつたであらう、芳子に取つても今日の『見合』は意外なのであつた。兄の鐵也は今朝、學校の行懸けに、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『ヤア米子、お前今日見合に行くのか?』と兒戲らしく調戲つてゐた。

其夜、母親は滅多に訪れぬ芳子の部屋へ、落着かぬソワ〳〵しい面持ちで這入つて來た。

『奈何しようね仕度は、孰せもう仕度なんかは揃えて上げられないつて云う事は、繰り返して話してあるんだが………』

『………』でも、芳子は平素になく軟かい顏を向けてゐた。

『………何しろ後家で三人の子供を仕立て上げたんだからねえ、普通大抵の事ぢやないもの』早や母親の眼が何故とも知らず曇つてゐる。五十過ぎて後家になり、借金と資産を併せ殘された母親は、誰に逢うても、奈何な場合でも『後家で三人の子』と云う言葉と自ら涙含む事とを忘れなかつた。三人の子とは鐵也と米子と、他のもう一人とであつた。

『爾麼に仰有つても未だ先方の挨拶も聞かないのぢやありませんか、それに米子の心持ちも奈うだか訊いて見なければ』

『先方は好ささうだつたよ、米子だつて莞爾してゐるから惡い事は無いんだらう』

『けれど、さうは行きませんよ、ニコ〳〵してゐたつて、今の子供と昔の子供と異ひますから奈何云う事を考へてゐるか分りません、一應は訊いて見ての上でなければ……』

母親は、一寸詰らなさうな顏であつたが、

『ぢあ、まあお前から訊いて見てお呉れな』

こんな時だけ家族の圏内に入れて貰へるのを、芳子は却つて煩はしくも思ひながら、それでも快く承諾した。

『嫌だよ、姉さん私何だか戯談見たやうで、平氣ですの、だから今日も先方の人を熟く見て遣つたわ、先方の人は首低いて而巳居たけれど…………お母さんが首低いて居るものだつて私の袖を引いたりして…………』お米の聲は乾燥いでゐた。

『米子！靜かに考へて御覧、お前の今の境遇と、お前の志した仕事とをね、お前の今の境遇は、これから一年も二年もを安泰にお前の志に添うて行き得るものと思へてますか？』芳子の言葉は儼然としてゐた。米子は首低いて了ッた。敢て乾燥に紛らして居た胸の奥底を痛々しく生々と引摺り出されたやうな怖れに、膝に重ねた其手先は細かに戰いてゐる。芳子は語り續けた。

『姉さんの心持ちから云へば、甚麽にしても、米さんをもう少し家に置き度い…………けれども、又思ひ返して見れば、何卒して米さんの涙の多い、僻心の多い、此頃の紛擾から救ひ出して上げ度い、而してもう少し米さんを柔順にして、大きい幸福が納めさせて上げ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たいと思ふ――そりや神樣ぢやないから、奈うした方が可いのかは確然分るものぢや無いけれど、まあ人の心で、熟く考へて、恁うした方が可いと思つた事を爲るより他はないのだね、米さんには未だ獨立の腕は無し、此間中のやうな厭な事ばかり重つて、米さんが平素思ひ立つやうに、家を出て…………なんて云う事は、あれは米さんの年若い空想に過ぎないのだよ、そんなに世間が易々と渡れるものではない、獨り逃げて出た處で立志篇にあるやうな甘々とした事がザラに在る譯のものではないし、畢竟は悲しい事に落ちて行くのだねえ…………雖然姉さんは、決して強つて厭と思うものを無理に嫁かさうとするのでは無いよ、厭なら姉さんが引受けて、屹度破談して上げる。只、米さんは、もう眞面目に少しは考へる事の出來る年だからね、熟く考へて見て、姉さんを氣の置けない相談對手にお爲』恁う云つた芳子は、心持ち笑つて見せた。米子も嫣然して、見上げた眼には堰き兼ねた露が溢れてゐた。

『私はね、嫁くのが厭なのでは無いのですけれど、自分の勉强がしたいの、それで兄さんには獨身で勉强して行くつて決心を話しましたの、だからこの話は兄さんが破談して下さる手筈に成つて居ますわ…………奈何しませうねえ、姉さん』さう云う米子の言葉は、喉咽の邊りに、堪え難げに纖弱く顫へてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

兄弟の中で一番氣に張りの無い此子に、術も無く頽へてゐる其小さい胸に、假りにでも此の解決の重荷を抱へさせるのは、餘りに殘酷であつたと、芳子も悲しい氣分に胸を押された。父親が在つたなら、母親の權威ももう少し重く、却つて此の子には左樣あつて欲しい親の威に保護はれて、親の取捨の許に恁う迄心を痛ませもせずに濟んだらうと怜しく思つた。

——二十年前、護謨の乳管を力無さゝうに啣へてゐた、片手の上に乘りさうな畏縮た小さい赤兒が、乳房の無い芳子の懷から、初めて訪れて來た寛容見える人の好さゝうな小母さんの懷中に移されて行つた時、母親は氷袋に押へられ乍ら、厚い布團の上に產後の幾日かを混頓として眠つてゐた。

里親に可愛がられて、生母に愛せられず、十歲に近づく迄、片田舍に一人つ子として、養双親の愛寵を聚めて居た。其米子は生家に歸つても、言葉激しい實母に對う疑懼は晴れなかつた。狂氣した養父、橫死した養母を唯乳のみの緣ある親とは思へなかつた——

左樣した事情が煩ひして、生家に生ひ立つ米子の境遇は何時も苦かつた。

二日、三日、母親方の叔父は幾度か往來して、緣談に就いての調停をした。此の家に遠

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

慮の多い叔父は母親の涙を聽き、鐵也の若い熱誠な反對を聞き、芳子にも意見を求めた。

『米子は何んて申ますの』

『…………姉んに任かせて置いたから、姉さんの儘に、と云ふ事でした。奈うも中々皆さんの頭がむづかしくつて…………』と叔父は輕く笑つた。

『ほんとに、船頭が少し多過ぎますね、かう云う事は限りなく考へれば、限りなく不安になりますしねえ、母親がもうあゝ思ひ込んで居ますし、今後の米子の事情や、あれの性質も考へて見れば、どうも嫁つた方が當人の幸福のやうに思へますから、纏まるやうに願ひませう、鐵也には私から云ひ聞かせますゝ。其代り、先方の希望でもあり、又當方の希望でもある條件の事を更めて念を押して置いて頂き度う御座います』

米子は繪畫に深い趣味を持つてゐた。米子の志を成させる爲に、今迄の勉强を續けさせ度いとは皆の願望であつた。而て先方も亦、同じ道に努力して居る人で、其生涯を新しい妻と共に、同じ趣味に生きようと希う人なのであつた。

叔父を歸すと、芳子は鐵也を呼んだ。鐵也は緊張した血氣を湛んだ瞳の底に漲らしてゐる。

『鐵也さん、お前莫迦にむづかしく考へちやつたね、物は考へやうだよ、甚麽にむづかし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く考へたつて、仕合せの惡い時は惡いし、放心してゐても仕合せの好い時は好いものだから、まあ姉さんにお任かせ』と芳子の調子は輕く無雜作だつた。

『ぢや奈何するんです』

『嫁る事にしますの、そりやもう、奈何しても納まらないのなら、又引取る道もあるし、家に居たつて米子はじめ〳〵泣いてばかり居なくてはならず、それよりは家でも持つて、氣の合つた同志になれば、二人で勉强した方がどれ位幸福に、家に居るよりは眞面目な勉强が出來るか知れやしない、其內に鐵也さんも大人――つて、今でも大人ではあるけれども ね、モット大人になるし、其時には思う儘、具體的にも米子の相談相手に成つてやられるぢやありませんか』と、芳子は微笑した。

『さうだ！こりや好いや姉さんの考へも無雜作で、ぢや姉さんが好いやうになすつて下さい。お任かせして私は默りますから』

額の薄曇る迄に神經を焦立たせて、憂慮に思ひ詰めて居た鐵也は、極に入つて思はず路が展いたやうに、縛しめから俄かに突き放されたやうなケロリとした輕い色を見せた。

『姉さんだつて、鐵也さんだつて考へる焦點は、唯米子の幸福、と云う事一つなのだから ねえ、それに不服を云うなら此處まで話の來ない內の事だし、お母さんの氣質と米子の今

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

後の周圍と云う事も考へて見れば、隨分面倒が持ち上るだらうと思はれるし、それに今は昔と道德觀念が違ふ、お叔母さんが、お嫁に被行つた時のやうな、刀にかけても再び我家の敷居は跨ぐな、なんて、そんな事は姉さんも云ひもしないし、お前達も亦思ひもすまい。將來どうしても調和し相もない家庭に、奈何しても壓え付けて置かうと云うのぢやないもの、米子が人の妻として、家庭の人として、女らしい優しい深切と、隱忍とにベストを盡しても猶相入れぬ性格なら、必要と認めた時に、何時でも姉さんは今日の責任を果さう、姉さんも此度の事は隨分心配した。それに鐵也さんは未だ若い、鐵也さんの人生は未だ机の上のものだもの、鐵也さんの其の淸純な若さや、赤熱的な生一本の眞面目は、ほんとに幸福な尊いものだけれど、外面のみ滑脫に而も棘々しい世間には未だ何の交涉も持つて居ないのだから、これから世間に對つて行かうとする米子に云爲するは少し早いよ」說き續けて行く芳子の前に鐵也は默して居た。芳子は恁う語り乍も、若しや今、自分が、鐵也や米子に生ひ立つて行かうとしてゐる其各々の個性を蹂躪して居るのではあるまいかとの遠慮が不圖起つて、却つて自分の仕打ちや自分の云う事が惡い事でゞもあるやうに思へて來た。而して口を噤んだ。

然し、話はそれなりに一段落着いて了つた。皆は快く芳子の取り計ひに任かせたのであ

る。

何事も内輪にと話し始めて、事は大きく成つて行つた。新しい唐草模樣油單の釣臺が一荷、華やかな結納の草々が贈られたのである。賑はしい日は朝に夕に近づいて來る。家の人の總てが、迫つて行く緊張した氣分に取り卷かれ乍ら、各自は各自中心の種々な雰圍氣を作つて、二重の忙しなさと張り詰めた氣色とを其眼に、其頰に漲してゐた。

女中のそよは、遠國に在る情人と自分の身の上とを案じ續けた。

『ねえ、お孃さん！』恁う云つて、夜遲く仕事を終つてから、早くから床に就く芳子の眠りを妨げに來た。

『私も此處で斷然意見を附けて早く世帶を持たうかと思ひます。恁うして居ても年はかり取るし、Yさんの方は到底私が女房に成れる譯の者でもなし、兄さんの云ふ通りに世話して貰つて、分に合つた人と世帶を持つた方が可さ相に思ひます。當に成つて成らぬ人を際限なく待つて居ても仕樣がないし…………ねえお孃さん、奈何しませう？』定まらない心細い自分の分別に、力強い裏書きが欲しさうであつた。

『さうだね、そりやもう、左樣に限るよ、Yさんが歸つて來られた處で、今度お貰ひなさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

る奥さん次第だからね、物の捌けた年増の奥さんでもお貰ひなされば、そりやお前の面倒は一生見て頂けるかも知れないけれど、左様でなかつたら、豈夫お妾の在るのを承知して來るお嫁さんも一寸無からうからね、まあそよが左樣云ふ氣に成つたのなら、早く左樣した方が可ささうだね』

『さうで御座いますね、ぢや左樣しませうか、他家へ行つても亦Yさんの歸つて被來つた時には、お孃さんから何とか談をつけて頂けば、物の分るやうにも成りますからねえ』

物の分るやうにとは、何を指したのだか、芳子には判然しなかつた。遠國に在るYは、そよがYと呼び捨てに成らぬ程、而してそよが公然とは口に出して語られぬ程、今は立派な地位に在る人であつた。然しそよがYへの愛着は尠いものではなかつた。Yが不自由をして居るだらうと人傳に聞かされた噂ばかりでも、そよは寢られぬ程に心配した。

『お前は莫迦だねえ、お調子者だよ、他人が水に飛び込めと云つたら、へえと云つて飛び込むだらう、火に這入れと云つたら、よし來たと云つて這入つた行くだらう――』と芳子の母親に笑はれるのを辛がつて、內密で二十圓、十五圓と苦しい都合をしては、絹を送つたり、珍らしい食物を送つたりして、自分の額に太い皺の寄つて來るのも知らず、書生時代のYとの馴れ染めを、何時迄も心に藏して、七つか八つ年下の、日每にお互の位置の隔

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて行くＹの歸りを一向に待つた。

『……今迄待つたものだから……もう戰爭さへ濟めば今年の暮には歸つて被來るでせう、どうせ奥様には成れなくとも、恁うして居さへすれば、歸つて被來つた時に、又面倒も見て頂けますからねえ、あの年の生れの人は、何の女にでも手を出したがるけれども、淡白した、それでゐて人情の厚い人だから——』と濃い未練と深い執着を感じて居た平素の心を、打消すものが可なりに強く萌え出して來たかのやうに見えた。而して其世帶を持つ準備の末端に迄も空想を走らせ、芳子に訴えて力添えを賴むのだつた。米子の縫物を手傳ひ乍らでも、未だ影すらも認め得られない良人を、もの有るが如くに描き出す心に自ら惑はされて、ソワ／＼と他の話、他の仕事は手にも附かぬらしく、米子の行く後を追ひ、芳子達が內談し、準備する婚禮の話に眼を睜り、耳に入れようとした。

　懇意の人や、近處の人達からの祝物が、一部屋に狹く積み上げられたり、飾られたりした。いろ／＼な女の人達が挨拶に來て、爾うした物や、米子の仕度を一々出させて展げて見て行つた。母親も亦展げて見せるのが、得意な一つの自分の仕事でゝもあるかのやうな誇りの色にイソ／＼として、一時も他と談笑せずには居られぬやうな落着かぬ樣であつた。米子には坐つて話して聞かす事もなささうに、買物に外出勝ちで、後家で育てたと云う三

人の子の、其一人の落着きを『ほんとに貴女のお力でねえ』と一人でも餘計に賞めさせずには置かなかつた。鐵也は、深く諦めた者の如く、芳子には柔順であつたが、焦々しく何等かの感情に神經を尖がらせて居る事は蔽へなかつた。彼の耐え難い其憂悶は、母親に對つて棘々しい皮肉の言葉と成つて行つた。
『お母さん、此の家が潰れちややあ可いんですね、面倒臭くなくて』
『莫迦な事をお云でない、潰れたらお前方奈何して食べて行きます』
『食べて行く位、奈何にでも成りますよ、お母さん見たいに慾張つてばかり居たつて仕方がない、米子なんか、家の人數が一人減ると云ふお母さんの慾張つた勘定の犧牲になつて他家へ嫁られるんだ…………可いかい、米子、其積りでおいで』
『莫迦な事を！お前と話すると、お母さんはもう癇癪に觸つて耐らない、厭だからお芳の方へ行つてお呉れ』氣の短い母親の眼には怒りと癇癪が燃えてゐる。
『鐵也さん、お默り、お前が惡いよ、男ぢやないか、齒を喰ひ縛つてもお耐へ』と芳子は窘めたが、自暴になつたやうな其態度の中に、弟の胸底を思ひ遣つては云ひ知れぬ慘ましさが胸を銜いて來る。
鐵也と母親と爭ふ事は今迄に無い事であつた。平素鐵也は、母親に向つて、圓滑に彼女

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の痼高な權柄を調和して來た。それが米子の緣談以來、母親と鐵也とは地を替へた。母親は他に心を潤ふす喜びの爲めに、平素の激しい小我を出さなかつた。却つて鐵也は愛する妹を奪はれる淋しい心に焦々しさを沸き立てゝ、押へ難さうに見えた。處女を去る――只處女と云ふ二字に奧深い概念的な意義を埋める、初心な青年の心に――妹の上を耐え難く懊惱してゐるやうにも見えた。而して鐵也の妹を愛する心持ちが、非常に深かつたと云ふ事を、今更に感じた芳子は便無い心地に　しまれた。

『處女の尊さ』『純潔なる處女の聖さ』それは時間（タイム）に限定されるものではなからうか、處女は尊い、けれども、四十、五十、又六十の齡を數へる普通の女の處女の二字は、猶且、深奧な意義と神秘を人に與へるだらうか、自らも、我處女なり、と、處女と云ふ名に相應しい華やかな滿足を以つて誇り得るであらうか。一意、神に捧ぐる童貞、稀なる天分に自覺した自己へ捧ぐる稀なる童貞を守る人以外には、恐らくは淋しい境涯に、止むを得ぬ強いられた誇りを感ずるに過ぎなくはなからうか、年老けての處女は、人間として知る可き世間を知らず、潤ひも無き頑なる小さき己れの世界に、花の紅あるを知らず、他人にもぎじちない醜さを與へるのではなからうか。若しさうとして見れば、處女の聖き誇りは、其絕頂を矢張り處女の名に相應しい、血の燃ゆるやうな時代に見出さなければならない。さう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

してこそ凡人としての、處女の尊き誇らしさは、完全に納め得られるのではなからうか。と云つて米子に確に、今、其時が來たと云ひ得るであらうか、米子は未だ燃ゆる緋では無さゝうである――けれど――けれど、花の周圍に暴風雨は來さうだ、保護す可き軟かき繭はない。未だ、親の一字の許にある米子には誰の力も及ぼす可くもない。が、愛なき親の一字は風を誘ひ、雨を呼ばせる。力弱き花を其儘措くは傍觀むる人の罪ではなからうかと芳子は思つた。

軟かく、鋭く、巴のやうに渦を卷く人々の心の激しい表現の中に居て米子の乾燥ぎようも一層激しかつた。

『さう皆と一緒にはしたなく乾燥ぐものぢやない、少しは落着いて仕事をなさい』

『え、どうせ私ははしたないのですもの、私は怠け者だから何もしたくないのです』

坐らせやうとする芳子にさへ、不快らしい反撥を見せた。

芳子には、恁うして皆が、只キャツ／＼としか云はぬ日送りをして居るかのやうに響いて、母親へは苦々しく、米子へは傷ましかつた。若しや、結婚と云ふ、未だ期待せぬ俄かの驚愕に動搖させられて燥狂になつたのではあるまいかとさへ案じて見た。而して自分の其年頃の時、緣とか婚禮とか云ふ言葉は、訊いたゞけでも耳を赤らめなければ居られなか

つた羞耻の情を、米子には見出せぬのを不思議にも思ひ、時代の推移を思うても見たりした。

『鐵也さん、米子は此頃奈何かして行つたね…………少し樣子が變つて』

『えヽ、もう米子は諦めて居るのですよ、却つて虚心になつたから乾燥るのでせう、まあ姉さん餘り心配しない方が宜う御座いますよ』

　それでも心配せぬ事は出來なかつた。一緒にお湯に行つたり、從來になく毎朝髮を撫で付けてやつたり、皆と一つお膳に座る事は珍らしい芳子も、出來るだけ米子等と一緒に食事を採る事に心懸けたりして、襖一枚、廊下一つの大きな隔りは――それは儼しい母親への表面だけのではあつたが――兄弟の間に除られて行つた。

（未完）

「初戀のなりゆき」前號誤植及脱字。
（一）の一行目「その男子」は「その男の子」。次の頁の六行目「氣が付いたのです、早く――」は「氣がついたので、す早く」その次の頁の末から二行目「あの上で」は「木の上で」。それから（二）の二枚目の末行「次郎」は「次郎さん」以上。

初戀のなりゆき

岡田八千代

三

翌日いつもの通り學校へ行つて見ますと次郎さんは來てゐません。もしや遲刻かとも思つてましたけれども、とう〳〵終りの時間までその人は來ませんでした。私はまた淋しく私の道を歸つて行きました。その翌日もその又翌日も次郎さんは來ませんでした。

その中にいつか私も淋しさに慣れて歸り道を急ぎましたが、しかしどうして次郎さんが學校を休むのかゝ氣になつてなりませんでした。けれども何となく氣の咎める處があるので外の友達に次郎さんの事を聞くのは厭でもあり又、病氣ならば、どうしても家へ診て貰ひに來なければならないのだといふやうな事をやつぱり考へて居たのでした。さうかと云つて次郎さんの家の側へ行つて見るのも何となく恐ろしいやうな氣がして、かなり御てんばだつた私も次郎さんが見えなくなつてから妙にぼんやりしてる日が多くなりました。それに家へ歸つても次郎さんの方へは遊びに行きにくいので、自然家の中でばかし遊ぶやうになつてしまひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「歌子、お前はこの頃なぜ家にばつかり引込んでゐるの。」

とよく母に不思議さうに聞かれましたけれど私はたゞ默つて室の中につくなんでゐました。

そんな事が半月も續いたある日の事でした。私が例の通り鞄を下げてブラリ〳〵と誰よりも遲れて家の方へ歸つて來ると、其處の角の處に丁度人でも待ち合してるやうに立つてるのが次郎さんぢやありませんか、私は思ひがけなかつたので思はず、

「まア、次郎ちやん。」

と云つてしまつたのでした。云つてしまつといて私ははつとしました、何故ならば私はまだ次郎さんとは一ぺんだつても口を利いた事が無かつたのですから。

私は自分ながら顔のほてるのを覺えました。それに元より『我』の強い私でしたから、あんな事のあつた後に私の方から口を利くといふ事は口惜しい事でなくちやなりませんでした。私は殘念な事をした念と辱かしいのとが一處になつて、直ぐに走けぬけてしまはふと思ひました。その時、

「僕ね、君を待つてたのよ。」

と次郎さんが云ひました。私は再び思ひがけなかつたので、走け出さうとしたのを止め

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て次郎さんの顔を見ました。
「僕ね、病氣だつたの、けれども、もう直つたんですよ、だからね、僕、今日君が歸つて來たら一ぺん遊ばうと思つたの、それで待つてたのよ。」
次郎さんの言葉は女の子のやうでした。それに病氣した故か、少し赤い髮の毛が長目に額にかゝつて、色も前よりは一層白くなつて、頰の處だけがぽつと赤くなつてるのが、まるで人形でも見てるやうで美しいつたらありませんでした。
私の心はこの次郎さんのなよ〳〵しい姿を見ると不思議に柔かく優しくならずにはゐられませんでした。
「ね、いゝでせう君、僕ね、外國の繪端書を深山持つてますよ、それを君に見せやうと思つてるんです、病氣の時お父樣が下すつたんですよ。」
とは云へ私の强情な心はまだ次郎さんに優しい言葉をかけるまでにはなりませんでした。しかし私は默つてうなづいて次郎さんの行く方へ行く事になりました。
「僕ね、病氣の中ね、熱が四十度もあつたんですつて、それでね、學校のうは言ばかり云つてましたつて、それからね、僕君の事も云ひましたつて、君の名歌子さんと云ふんでせう?」

次郎さんは道でこんな話をしました。私はやつぱり無言で次郎さんの美しい顔ばかりを眺めてゐました。

次郎さんの家へは間もなく來ました。けれども次郎さんは何故か玄關からは上らずに、左へ反れて生垣の外を一廻りして庭口から私を庭へ連れ込みました。丁度秋口の事で、そこには種々な草花が花を持つて美しく咲いてゐました。私達はその中をぬけてとある小ぢんまりとした室の前へ出ました。

「此處僕の室なんですよ。」

云ふ通り其處には小さい本箱や小さい机がきちんと置いてありました。私は次郎さんの家が門の處で見たよりも大きくて立派なのに少しどぎまぎした形でした。

「お上んなさいな。」

次郎さんに云はれても私はちつと其緣の處に立つてゐました。

次郎さんは直ぐ上つた足で向ふの机の側へ行きましたが、やがて大きな箱を重さうに抱へて私の立つてゐる緣側の處まで持つて出ました。

四

私はなんだか夢を見てるんぢやないかと思ひました。それでやつぱりぼんやりしてゐま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した。

「此繪端書はね、みんな外國のですよ、僕が病氣したんでね、可哀さうだつて父樣がみんな下すつたんです。だからみんな僕のです。けれども僕、君にならら上げても好いんです。」

次郎さんの云ひ方はまるで、私が考へてゐた次郎さんとは違つてゐました。私の考へてゐた次郎さんはへんくつなお澄しでしたが、今私の前にゐる次郎さんは、ちつとも隔ての無い人なつつこい次郎さんなのです。

次郎さんは私が默つてるのにも搆はず、どし／＼箱の中から種々な繪端書を出して見せました。

「これはねナイヤガラの瀧ですつて、隨分大きいのね、僕これ見た時驚いちやつたんですよ。」

次郎さんはさも驚いたやうにその眼を丸くして私を見ました。私はその時次郎さんの黑眼はすつかり眞黑ではなくて少し茶色してるなどゝ思ひました。

「これね印度の美人ですつて、美人つてんでも美人ぢやないのもあるのね。」

かう云つて次郎さんが一枚の繪端書を私に出して笑ひました。その時私は又次郎さんの前齒が度外れに大きいのを見ました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「これはね露西亞のお寺ですつて、隨分とんがつた家根ですね。」

こんな風に次郞さんはそれからそれと繪端書を說明してくれました。やがて次郞さんの出す繪端書が私の袴の膝の上に一ぱいになりました。

その時私はどうしたのか急に悲しくなつて來ました。それでも泣く可き場合ぢやないと思つてゐたので、それとなく顏をそむけて庭を見ました。

庭には私の大好きな鷄頭や萩や芙蓉やが一ぱいに亂れ咲いてゐました、聞きすますと、眞晝を靜かにこほろぎが鳴いてゐます。

「君、もう厭になつたの？」

私の肩に温かい手をおいて次郞さんが私の顏をのぞき込みました。

「いゝえ。」と私ははじめて口を利きました。けれども私の悲しみはまるで滿漲の押へがたい力のやうに私を押へつけるのです。

「いゝえ。」と私は再びいひました、その時私の涙がばら〳〵と私の膝に落ちました。

「君、どうしたの、君、何が悲しいの、お腹が痛いの？」

と次郞さんが忙てたやうに私の腰かけてる前へ廻つてその顏を近くに寄せました。

「いゝえ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「どうしたの、僕惡い事したの？」
さういふ次郎さんの眼からも今にも涙がこぼれさうに瞳が悲しさうに動きました。
私は急いで着物の袖で眼を拭きました。そして、
「もう好いの。」と云ひました。
「さう？」と次郎さんは私の肩においた手を放して私の膝の上に一ぱいになつた繪端書を取つてくれました。
「もう君、繪端書見るの厭ですか。」と次郎さんは氣遣はしさうに聞きます。
「いゝえ、いくらでも見るわ。」
から私が云ひました。私の『我』は私の今の涙と共に流れたのか、私は今度はちつとも澁らずに口が利けて來ました。
「でも、あんまり一どきに見ると父さんが毒だつて云ひましたからね、あとのは又明日見せて上げませうね、それでね、僕今日は、僕の一番好きなのを見せてよ。」
「さうどんなの？　景色？　人？」
「人なの、それはね、素的に綺麗な人なの、西洋人ですけれどね、綺麗なんですよ。」
大變な巧能書で見せて呉れたのは、米國か英國かの女優の立姿で、洋服にキラ〱と硝

子の粉末を遣つて彩色してある子供の目には眩ゆいばかり美しいものでした。その女の顔はやゝ丸顔で目の大きな髮の毛の濃い、口付が何とも云へぬ可愛らしいのでした。

　私も思はずその繪端書には見とれました。そしていつまでもいつまでも見てゐました。

「僕ね、その繪端書大好きなんですけれど、君は嫌ひですか。」

「いゝえ、私も大好きだわ。」

　私はなほその端書に見とれながら云ひました。

「ぢや、君ね、何故その端書好きか知つてゐて？」

「いゝえ知らないわ。」

「そんなら云ひませうか。」

「えゝ。」

「君に似てるからなんです。」

　私はびつくりして次郎さんの顔を見ましたが、次郎さんは平氣で、

「嘘ぢやありませんよ、ほんとですよ。だけど、その繪端書君に上げませう、僕もう君とお友達になれたんだから要らないもの。」

（未　完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世間知らず

岡田ゆき

A――金持の息子。
B――世なれた青年。

A。僕はまだ他人から馬鹿野郎と怒鳴られた事もないが、わざとらしい御世辭にはうんざりする。
B。君はよい身分だ。羨しいよ。
A。他人が僕に對して、尊敬をはらつてる樣な事を云ふのは親の名があるからだ。さう思ふと他人の言葉が皆空虛に聞へていやでたまらない。
B。そんなことを思ふのは、親に對してすまない理だ。世間知らずはよい者だよ。
A。一寸見はよいかも知れないが世間知らずと云ふことは決して誇ることぢやないむしろ悲しいことだと思ふよ。
B。然し君の樣な人を世の中へ突き出したらそれこそどうなるか知れないね。
A。それ程僕が、否、世間知らずと云ふとは弱虫かね。けれどもよく考へて見給へ人間は始めから、さう世の中の波が上手に泳げるものぢやない、打ち寄せる大波に、足をすくはれて倒される。そして再び起き上つた時倒される以前より、きつといくらか大きなものになつて居なければならない理だ。その意味で僕は何度も倒されては、何度も起き上るよ。さうして居る内に、自分がきつと立派な者にな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れるに相違ない。(輕く笑ふ。)
B。君は強い心を持つてゐるんだね。まあ思ふ樣に世に立ち給へ。僕は影ながら君の前途の幸福を祈つて居る。そして君が倒れたと聞いたら、大きな期待を持つて起き上るのを凝視することにしやう。
A。あゝどうか、さうして呉れ給へ。

アトリエの畫

妹——大村と云ふ洋畫家の實妹。
女——肖像を描かせに來る若い美しい女。

妹。(描きかけの畫布の前に腰かけて、ひとり考へて居る。)
女。(ドーアを開けて入つて來る。)おや大村さんは御留守なの。
妹。今日は。
女。(默禮する。)
妹。私もう少しさつき來ましたの。そしたら兄は此處に居ないのです。これ貴女ね(繪を指す。)
女。えゝ、いつも丁度今頃來て描いて戴くことになつてますの。私が伺ひ始めてから、お留守のことなどないのですよ。
妹。さうでしたね。私もこうして、毎日今頃此處へ來ますと、兄は貴女を熱心に描いてゐるのですわ。まあおかけなさいな。
女。ありがたう。(妹の側の椅子に腰を下す。)
妹。丁度一週前貴女が肖像を描かせに兄の處にいらつしやり始めて二日程たつてから、私が毎日こうして、貴女のおいでの頃を見はからつて、此處へ來るの何故か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

知つてゐらつしつて。

女。いえ、貴女の御心など、わかりつこないぢやありませんか。それに貴女と只二人きりでお話しするのは今日が初めてですもの。

妹。さうですね。實は貴女がおいでなすつた、三日目に私が何の氣なしに此處へ來ました時に、畫布に向つて畫筆を働して居る兄の目にたゞならぬ光を見ましたのこう何と云つたらよいでせう。丁度闇黑の夜に燃える篝火の樣な輝きでした。

女。まあそんな光を、大村さんのお目に御覽になつたとおしやるの。

妹。えゝたしかに見たのです。それがどう考へてみても兄の心に戀の火が燃えてるのを意味する樣に思はれますわ。そして兄の目があんなに輝いたのを見たのは、義姉が亡くなつて以來始めてです。それから、私はどうかして兄の心を知り、もしも戀する人が出來たなら、どうか其の思ひをとげさせたいと考へる樣になりましたの。それから今日で五日、貴女のいらつしやる時分に來ては、兄の心を探つて居ましたんです。

女。(默つて微笑して居る。)

妹。ところが今朝一寸用があつて此處へ來ますと、兄が此の繪に向つてしきりに獨言を云つて居りますの。そして私が後方に來たのも、氣付かない樣子でした。私はそうつと靜かに立つて居ました。ねえ貴女、兄は貴女を亡くなつた義姉の再生

の様に申て居りますの。貴女は御存じかどうか知らないけれど、兄はそれは〳〵熱烈に義姉を戀した結果、その望みが、かなつて、漸く添ふ事が出來たのですが滿つればかくる、とはよく云つたもので間もなく義姉はそんなに長くも患はずに、亡くなつてしまつたのです。

女。御氣の毒ですわね。

妹。えゝ兄は隨分可哀想でした。それからと云ふものは兄は、まるで冷い人間になつてしまひましたの、けれど貴女がいらつしやり始めて以來、また義姉が居た頃の兄に返り初めましたのよ。

女。それでは大村さんは私を戀して居らつしやるとおつしやるの。

妹。もうさうに相違ないのですわ。それに貴女が餘りよく義姉に似ておいでなのですもの。

女。ホ、、、さう、ぢやきつと他人のそら似とでも云ふのですわね。

妹。そして兄はもう此繪も二三日で完成する。さうすれば、もう彼女に逢ふ機會も無くなる。又僕はもとの淋しい僕になつてしまふのだつて云つて居りました。私は此の言葉を聞いてたまらなく悲しくなりましたの。それで繪が出來上つてしまつて後も來て下さる樣に私がお願ひしやうと思つて。(女をぢつと見る。)

女。私が兄樣の奥樣に似て居ると云ふ事はそれは自然のした業ですわ。奥樣に似て居るから。大村さんの戀人にならねばな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

らないと云ふ理はないぢやありませんか。ねえ、さうでせう。

妹。(一寸まごついて。)えゝ、そりやさうですとも。

女。私はね、大村さんにとつて、其の描きかけの絵と同じものですよ。貴女の兄様の戀しておいでなさるのは、亡くなつた奥樣ですわ。つまり私は奥樣の影法師なのですね。けれどそれは、只、外面の事で奥樣と私は何處迄も異つた二つの個性です。私は影法師になるのはいやですわ。私は只、大村さんに、肖像を描いて戴きに來ただけですから、描けてしまへば此處へ來る用もない筈です。又、私は他人のために自分を犧牲にしたくありませんの。何處迄も私は私の道に行かねばならないのです。

妹。兄は不幸ですわ。貴女はどうしても來ては下さらないのね。

女。大村さんがいくら、私を思つてゐらしつても、私の靈が結ばねば、もうそれぎりですわ。私は他人のために自分を殺したくはないのです。何度云つても同じ事ですわ。大村さんは奥樣の事をそれ程思つて居らつしやるなら、終生心の中に奥樣を描いて他人の私などにさう容易に戀などお出來なさらない筈よ。まあそれにしても、大村さんは何處へおいでなすつたんだらう。(獨言の樣に。)大層おそいこと。

妹。(ぢつと椅子に寄つたまゝ動かずに居る初夏の太陽の光が横顔に影を投げて居る。)

青鞜詠草

畔蒜こと子

生るる子の女なりせば野菊など名づけまほしうおもほゆる秋
ましら菊にほふ頃かや吾子抱き野にたつ我のまぼろしにみゆ
ほのかにも一人うれひて菊つめば夜霧にしめるわれが額髪
ふりむけばげにもみにくくうつろひしわがうしろ手に涙しじなり

以下戀愛巡禮の著者へ

身を砕きあはれ悲しういたましう打さらすべき日を思ひ泣く
こらへかね涙おさへてよみはしつあまりに君のこし方戀し
みづからのかひなき生命みにくくもかへりみらるれ君がみ前に
げにわれのゆく道にしてまづ君のたどり給へる跡のかなしも
まづ君は生命を千々にうち砕きなげきたまひぬいとしいかなや
めさむれば胎兒かすかにうごきをり底冷えのする秋のよふけに
母らしくすなほにわれとわが心ならされてきぬ君知らざらむ
紅き林檎ひそかに頰にあてながらさかしくゑみぬ初秋の風
林檎林檎生るる吾子が頰を思ふあき風落つる草の片かげ
狂ほしさぢつとこらへて吾子がためさかしくただに胸すましゐる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吉原芳子

戀か名か一つをとるにひた迷ひまよふ心のかなしかりけり

戀に更ふ望みをあまたもつといふ男心はねたしつれなし

なにごともあらがひ給はぬみ性ゆゑ悲しともまた飽足らずとも

うらまるる悲しきことも戀ゆゑとまたかかる身の幸を思へり

なげくこと怨むことさへなき夜はみ前にあるもうらさびしけれ

旅とほく君たつ日なりはつ秋の風ひそひそと鷄頭にふく

しづみゆく心のとほく夕空にもとむるかげを誰か知らまし

ひそひそと冷たき月の光りより胸によりくる秋よみ魂よ

輌音

川添ひの二階座敷のおぼしまに月のでしほをまつ身うれしも

大川の灯影つづきの君が宿訪はまほしやとおもひ暮らしぬ

やすけさのたえてなきまに玉章は文箱にみちて秋かせふくも

さらさらと秋かせわたる縁に出て足袋はくわれの瘦せにけるかな

わがふたり紅指染めしつまぐれのまた忘れなとさきいでにけり

いくたびか胸おどらしし思ひ出の浴衣うとまし初秋の日は

出久智郁子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

在りし日の君を描けば灰いろの生活のなかにひとつ光れり
念ひ断たんふと別れたるかの君の心うつりも運命として
家出でて一とせたちぬ故郷の海邊の秋のおもはるるかな
口にいづる唄ことごとくわれとわがさだめなりけり秋さめの夜は
たよりせず一とせすぎしわが家を忍べば庭にしら霧のたつ

磐城　浪人

ひとりでに逝く水のごと妻となり母となりゆく姿さびしも
湯あがりの廊下に出でてくろ髪をすける女にひかる濱風
おさなしう一人あるこそ堪へられね狂ほしうして今日もねぶらず
妬まれずねたまず男綿うちて小鳥のなかに今日もうたへり
わすれえずその夜枕にかよひたる水のひびきとひとのなげきと

澤田　小鳥

五つとせの深きなさけもわすれはてわがあさましさ君をのろへり
貧しき家冷たき人のなかにゐてはやくも人をのろひそめけり
このごろの空の色こそかなしけれわれ心よりわらふ日もなし

住吉　哀歌

ゆふざれば窓のポプラに風わたりあかき雲さへしづこころなし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

アカシヤの病葉のちる日となりぬわれにもおもふひとのあれかし

ひとしきり樹々に夕日のこもらひて葉裏葉裏に風わたるなり

アカシヤの病葉ひと葉ちりかかるこずゑあふぎて猿まわしゆく

靈　千代

子らはみな釣鐘草をつみにやりしづかにひとり君をおもへる

ひつそりとしばらく君をおもひゐぬ秋海棠の匂ふかたはら

うつつなく手と手かさねぬ秋ばれの障子に影の濃くうつりたる

醒めはててかくあるものを今更にいかなれば君戀をなけくぞ

高橋　てる

さびしさに暮れゆく空をみつめつつ直こひしさの涙ながしき

日もすがら母に抱かれて泣きゐたる秋晴れの日をふとおもひいづ

はるはるとあこがれの地にきつれども悲しや君にあふすべもなし

永井　芳子

あかねさす東の空をおほひなす片面あかるき雲の一むら

わが戀はあさのま白き露の玉ゆふべをまたできえさりにけむ

いづ方にゆきてなごまむ心ぞもあらぬみ空に旅をつづくる

二人づれ流し來ながしゆく音の三すぢの糸にあきのかせ吹く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

九月の歌壇より

この母と子のい向ふ朝げ夕のけの食ごとに久に遠に君おもふ　（朝鮮）

若山喜志子

はかなくも術なくもこひ泪涙の長き渚にうつけもさほる

おもひ深めてなくか梟今宵こそ月ののぼらば戸をおしてこむ

朝に夕にくる手ひく手もたゆたゆのあら木戸みつつよりつつこひしく　（潮音）

うすぐもる夏の月夜の木がくれに遠なく梟こゑもおろおろ

四賀光子

ほのかなる夏の夕の公園に遊划閲木なりてさびしき

穢さきにわづかにみゆるくもり空島だにさばず久しかりつも

おそれげもなく日向葵がおす萱深き影さへぬらし日向葵すも

山田邦子

秋立ちぬ子のことよりもたちまさりしみじみおもふ事もつわれは　（科學と文藝）

與謝野晶子

天の川白き夜空にかひなあげふれて涼しくなりし掌

たはむれていひ過ぎをして小半日わびしがれるもなほ若きため　（萬朝報）

平凡の酔にすぎぬが云ふことも身にしみぬとてわれなげくもく（今日）

うしろより賦ぬりながらものいひし叔父などおもふみそはぎの花

死ぬばかりささむばかりにものおもひしつつ秋草わけてあゆみき

紅椿いのちをかけてさくごとしその眞實のおよびがたかり　（反響）

茅野雅子

すてらるる夢さへあまたかさなれどもだして人をたのむあはれさ

水市場の横の紫陽花まん幽く光りかがやき物おもふごとさ

水晶のたまとおもひぬやめる子のきよらにやせて眠にれむれば　（婦人の友）

青桐の青き葉影にはふ蟲も身もやほそるらむ初秋のきて

運命をしる日となりてわがままをゆるさるることわりなかりけれ　（銀磐）

三ヶ島葭子

さばかりにわが世たのしとおもはれど夢をおもはぬ心となりぬ　（新潮）

生きものの數にもれれば神のごとされてありし子も遂におきいづ

あへばみなふるさとびとは唯にわが兒をほめていぬはた寂しかり

原阿佐緒

×

久しぶりに母とならびてみてありぬポプラの丘の夏の夜の月　（水甕）

水町京子

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

善悪のことはりなどをおもふには餘りか弱き心なりけり
湯上りの爪のいとしさほんのりと乙女らしさの匂ひするさへ
荒木絹子

ゆらゆらと月がのぼれば乙女ゆゑ我幸多き淋しみをしる
よるべなき生命いのちとふれながらかかはりもなくわかれむとする
長岡とみ

美しき玉をだくてふ愁ひなりくだけやすると靜心なき
うらがなし一人らくしてともす灯にふと秋風のひかりよぎりし　（詩歌）
小谷清子

一人寢は銀のごとほの白く悲し冷たし夜もふけにけり
すがれたる棕梠の木ありて夕燒のあかれの空に風わたるらし　（アララギ）
築地藤子

夕ぐれのひとすぢ道にあかあかと光はゆるる寂しき光
蜩の高音なきかふ海沿の木々を背にして今かへる子ら
まんまんと海こそみゆれわがいゆく山の笹原かがやくまでに
服部胡頽子

廣葉長葉てりて閑なき黍畑人ひとりきてあゆみとりつも
あかあかと月はのぼれり煙突の上より中をのぞく人みゆ
夕まぐれ島かげをゆく黑き船はつかり赤く灯をつけにけり
小百合

丈高き玉蜀黍の葉のうごきうすら冷たく月いでにけり
ひそやかに水のながるる草原の茅萱の白穗ふみてきにけり
唐澤うし

ゆふぐれて遙けくもきし世の道向うにひかる星の寂しも

緑しげき家にきたればふかき晝白百合庭にさきゐたりけり
夏深き山の奥がに人なりて草かるらしも馬なくきこゆ
桑山よしの

そよろにも梢ゆらげばちらちらと目にうつるなり夏雲のいろ　（潮音）
世良田優子

ひと所雲かげろへば空の色けふはわきても秋らしくみゆ
幽かなる日の光こそあはれなれうつつにきよくロベリヤのちる　（反響）
宮本一枝

乳よりも白しひかれる實苺の花にあめふる春のあめふる
ダリヤ畑晝ふかくしてたえがたし雌犬の喉のあかあかとみゆ　（Ars）
白井英子

朝な朝な寂しき慾に無花果の實が肯肯と大きくなるも
轟轟ときしりちかづき汽車二つ何事もなく遠さかりたり
なきぬれし頰をばかくして夕暮の磯より宿の部屋にかへりぬ　（早稻田文學）
岡本かの子

圓らかに頸のくくりもうきてみゆきさ引きしめし紫の襟
白雲のわくなる里に安らけくすむとしきかばおちゐたまふや　（潮音）
天野たつ子

いささかの事もよろこびききたまふみ顏あふげばただにうれしき　（水甕）
長谷川清子

おもふ事なげなるさまに海にいりおよぎまはるになれし淋しさ
山本茂登子

たへがてに人のこひしくなりにけり夕影みちのひぐらしのこゑ　（アララギ）
山田およう

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

感想より追想へ

生田花世

加藤みどり様。あなたが私のあらした感想をそのまま投り出した書物「戀愛と貞禮」でも御批評下さいましたといふ事を、新聞の豫告で見ましたので感謝いたして居りました。一昨々夜、私は店頭で「婦人雜誌」を見かけましたので立讀みをいたしました。御非難のかどはよく分りました。そしてあなたの忌憚なき御批評を感謝いたして居ります。私に靈の生活の十分に營まれて居ぬことや、性慾に對する自制力の薄かつた事や、頭腦のはつきりして居ぬことや、思想の乏しい事や、何處かしら病的な事やそれは大抵お言葉のとほりのやうな氣がいたします。私にはあのあなたの可成り立入つた一寸お意地の惡いと思はれるやうな點も、それも皆私に對する御厚意からであると思はれるのでございます。

それで私には別段反駁いたさねばならない事はもとよりありませんし、然し御厚意を頂戴いたしましたしるしまでに、この手紙をお渡しいたします。

みどり様。私は今靈にも肉にも生活は充實して、大變幸福でございます。さうして一時は氣拔けがしたやうになつて居りました。ああ、この生活の靜けさ。日毎日毎の穩

かさ、愛する心は花のやうに匂ひ、喜ばしさは私を醉はせます。私は身體を安らかにして柱にもたれて、折々、夕雲を眺めたり、月のまどかな面に見入つて恍惚といたします。狂奔してゐた時代の私がその月の鏡にフキルムの如く現れるではありませんか。かうして、自然に私は、藝術に入つて行かうとして居ます。從つて、あの生醒（なまぐさ）いやうな感想から、凉風のやうなそよそよした追想へと、私のペンは走ります。「村の精神病者と生兒」はその第一歩のものでございました。

みどり樣。以前の私はかうした靜安を知りませんでした。走馬燈の如く現れ、現れて私を刺戟し動搖させるものに狂奔させられてゐた時代が私の本當の姿か、これからが私の本當の姿かと疑はれます。私の心には日を經るにつれて、過去の生活が鮮かに鮮かに意味多く現れて、私の思索に任せて展開いたしてまゐります。私はそれにぢつと目をつけて二百册ばかりの記錄帳を相手にして、何かを造り上げて行かうと思ひます。私はこれから本當の生活に入り、これから自分の生活をいとなみ、これから藝術を知り、藝術を造らうといたして居ります。みどり樣、この意味で「戀愛順禮」一卷はあれは藝術品ではありません。あれは人生記錄帳（ヒユウマンドキユメント）です。そうしてあの樣なものは私にはただ一度しか書けないものの一つです。そ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

れで私も我ながら、あの書物の貴うとさに打たれて了ひます。

感想から追想へ、追想から小説へ、これが自然に藝術家の歩いてゆく路なのではないでせうか。私は秀れたる表現の仕方をしたいのです。果して私にその才能があたへられて居りませうか。

少しお遊びにお出で下さいませ。御主人樣には二三回お目にかゝりましたが、あなた樣にはまだお目にかゝりませぬ。牛込區天神町五十三番地、田中銀行横町の奥、中村武羅夫樣のお家の裏の家です。本當に小さな隱棲(いんせい)といつた樣な家でございます。唯今樣には下駄箱の上に、コスモスの花を挿した竹筒があつて、その傍で飼猫がやすん居ります。本當に今日も靜かでございます。

右まで。　（大正四年九月廿八日）

日月社より　▲伊藤さんから「九月下旬どうしても歸京するつもりで、種々歸京後の計畫もたてゝ準備を急いで居りましたけれども、みんな駄目になつてしまひましたので、まぎわになつて原稿をかくことも手紙をかくことも出來ず、雜誌のことも氣にはなりながらどうもすることも出來ませんでした」といふ手紙が參りました。それは五日の晩はじめて本號の校正が出た時でした　▲平塚さん、岩野さん、伊藤さんと揃ひも揃つて、苦しんでゐらつしやいます。本號は四日ごろには晩くとも出ることになつてゐたのですが、印刷所の都合などで遲れてしまひました　▲青鞜詠草、感想、日記文の投稿を歡迎致します。文章はなるべく簡潔に願ひます。（F　記）

第二回奥村博畫會

今回同會に於て左の方法により奥村氏最近の作品を頒へるそうです。

一 取材は風景、靜物(果物、花等)

一 作品は二十枚を限ります(A十枚 B、C各五枚)

□A油畫四號(一尺五寸・一尺一寸)拾　圓
□B同　八號(二尺一寸・一尺七寸)貳拾五圓
□C同　十號(二尺四寸・二尺二寸)參拾五圓

――各金額總付――

一 入會申込と同時に最初の分を拂込んで頂きます(拂込金は五ヶ月に分ち各一ヶ月A貳圓B五圓C七圓宛)

一 作品は拂込最後の月に、申込順により發送致します

一 尚入會の際全額の二分の一以上拂込の方には一ヶ月以内に作品を送付致します。此場合殘金は作品と引換に申受けます
地方に限り送料は別に申うけます
(中途脫會の場合、既納會費のお返しは致し兼ます)

申込所　東京市四谷區南伊賀町四一　奥村博畫會

藤村會より

目下フランスにある島崎藤村氏を後援するために生れたる同會からかういふものが參りました。

一本會は島崎藤村氏の友人愛讀者等をもつて組織す

二本會は時宜に應じたる種々の方法により藤村氏に吾等の友情を表するを目的とす

三同情をもつて會員たらんとする人々を廣く歡迎す會員には何等規定の義務ある事なし

四入會希望者は東京麹町區下六番町一〇有島方藤村會宛にて住所姓名の御通知を乞ふ

五本會萬般の責任は左記の發企者總代之に任す

田山花袋　中澤臨川　戸川秋骨　馬場孤蝶
小山内薫　蒲原有明　有島生馬

藤村會差し向の方法として會員中有志の諸君より思召の御出金を仰ぎ在佛國藤村氏に贈與致し度と存じ候御出金は取扱の便宜上相成べく金五十錢以上に相願度來る十月十日迄に有島方藤村會宛にて御送金願上候

茜蹊御中

編輯をへて

こんどは伊藤さんがお忙しかつたとみえ廿日すぎになつても送つて下さらなかつたので、かういふものになりました。御寄稿下さつた方に厚くお禮申しあげます。長谷川さんのは五十幾枚ありましたが都合上約三分の一ばかりしか載せられず、荒木さんのも少し殘さればなりませんでした。潤野さんの「夜から朝へ」齋賀さんの「戰禍」岡野さんの「日記」其他はまだ澤山頂いてありますが追々のせてゆくことに致します。廿八日(係F)

雜誌規定

■毎月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵税壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■郵券代用は一錢五厘切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、補助團會費拂込は青鞜社へ。
■廣告申込、交換廣告は日月社へ。
■圖書、雜誌交換、購讀に關する一切の事務は日月社へ。
■原稿〆切期日は毎月十五日限とす。當分の間、日月社内青鞜係宛のこと。

大正四年九月卅日印刷納本
大正四年十月一日發行

禁轉載

東京市小石川區指ヶ谷町九十二番地
青鞜社内
編輯兼發行人　伊藤野枝
東京市京橋區弓町十三番地
印刷人　柴田杠一郎
東京市京橋區弓町十三番地
印刷所　千代田印刷株式會社

發行所　東京市小石川區指ヶ谷町九十二　青鞜社
振替東京二一一一六番

發賣元　本郷區元町二丁目廿五　日月社
電話下谷三二〇六番
振替東京二八九一番

大賣捌　東京堂

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■婦人の開放■女權の擴張■

思想界の羅針盤 反響叢書 藝術界の基調

■平塚らいてう女史著

〔『青鞜』讀者は定價の三割引〕

第二編

評論集 現代と婦人の生活

▼四六版三百餘頁・定價八十五錢（送料八錢）

「土曜新聞評」して曰く

其容貌に於て、其思想に於て、其文才に於て、所謂、新しい女の中の女として最も優れて居るのは雷鳥平塚明子氏である。單に好奇心の眼を以て見るも明子氏は明治の末から大正の時代へかけて世を騒がした名物女の一人であり、更に之を思想上より見れば來る可き何物かを暗示する日本婦人の先驅である。而して本書は、明子氏が世間の侮辱と賞讃との間に立つて奮闘せる行進曲を集めたるもの、其言論には未だ徹底せざる所もあり、多少奇矯に走るものもないではないが、其大體に於て惻々人に逼る力の潜んで居る事は爭ふ事が出來ない。世には食はず嫌いの人が多い。一口に新しい女と言ふ誤られた代名詞に呪はれて、思想界に現はれた傾向を見逃す事があれば、後日必ず悔を貽すに違ひない。

發行所 東京本郷元町二丁目二十五 日月社 振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代和歌選集叢書

■毎篇著者自選の歌一千餘首を收む■

■定價六十錢■郵稅八錢■

■襴子と金と小間紙の美しき裝幀■

第一編 黑曜集
前田夕暮著

■向日葵は金の油を身に浴びてゆらりと高し日の少さゝよ
■みのこゝし夢をいだきて嫁ぎ來し女の夜の美しさかな

第二編 行人行歌
若山牧水著

■いかなれば戀のはじめにかくばかりさびしきことを思ひ給ふぞ
■女あり都にわれを待つと聞く靜かなりけり夜半の山の火

第三編 萬物の世界
土岐哀歌著

■人間の立ちて歩るくも悲しけれ眠さむれば先づ背骨のいためる
■大佛殿のやれ板の寄附に筆とりて秋のゆうべのわが名をかけり

第四編 灰の音
與謝野寛著

■この男ふかき心のありてなし、ふとせしことにためいきをつく
■我が心ピザの斜塔にあられども光りの中に白くかたむく

第五編 戀慕流し
吉井　勇著

■一力のおあさにきゝしはなしよな、みにつまさるゝ戀がたりよな
■こゝろよく海も眠りに入りぬらん今すや〳〵と君の眠れば

第六編 遠樹
尾上柴舟著

■陽をあふげば少しめまいすこれをただに異なる今日のしるしとやせむ
■またしてもうき旅人となりにけり松生の上を富士の動ける

發行所　東京麹町區三番町八十四　振替東京一二九五三　植竹書院

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雄篇大作 **植竹文庫** 全譯縮刷

第一篇 サニン

アルツィバシェフ作
武林夢想庵譯
（四版）

原稿紙九百五十枚の大作

■定價九拾錢■郵稅八錢■

アルツィバシェフの代表的傑作、本書出でて露都の紙價を一時に高からしめ、主人公サニンの思想は忽ち露國青年男女を風靡し、サニン主義を奉ずる男女の秘密結社至る所に出現する有樣なる爲、遂に發賣を禁止せられたるもの、今無想庵氏によつて、完譯初めてなつた。

第三篇 罪と罰

ドストイエフスキー作
生田長江生田春月共譯
（參版）

原稿紙千四百枚の大作

■定價一圓四十錢■稅八錢■

フリイドリッヒニイチエ曰く「ドストイエフスキイは吾が就て以て何等かの事を學ばざるを得ざりし唯一の心理學者なりとす、彼は吾生涯の最美なる幸福の事件に屬す」と、然り、偉大なるドストイエフスキイを知らざるものは、これ藝術以上の藝術家を知らざるものなり。

第二篇 天才論

ロンブロゾオ作
辻潤譯
（四版）

原稿紙八百枚の大作

■定價九十五錢■郵稅八錢■

科學書にして科學書に非ず、文學書にして文學書に非ず、心理學?、生理學?、形貌學?、否、否、否、是等の全てなり。取材の豊富なるは更にも云はず、凡そ天才を論じてかくまで該博精緻なる科學的研究の根據に立脚し、而も興味湧くが如きものは蓋し空前なり。

第四篇 復活

トルストイ作
相馬御風相馬泰三共譯
（七版）

原稿紙千五百枚の大作

■定價一圓八拾錢■郵稅八錢■

復活は單なる小說ではない。大天才トルストイが心血を傾け、藝術の假面を破りトルストイズムを準規として、忌憚なく廿世紀文明を解剖し、批評し、叱咤したる獅子吼である。殆ど翁一代の思想を擧げて悉く其中に包含したと云はれ近代文明の一大經典と云はれてゐる。

近刊 第五篇 第六篇 戰爭と平和

全二卷

紙數約二千頁 百六十萬字の大册

發行所 東京麴町區三番町八十四 振替東京一二九五三 **植竹書院**

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

森田草平氏譯

カラマゾフ兄弟

ドストイエフスキイ

紙裝木版七度刷
總頁數約六百餘
一頁六號五百字

定價金九十錢
假綴分冊六十錢
送料各金八錢

本書はドストイエフスキイが永眠前一年（一八八〇）に完成した作で、トルストイの「戰爭と平和」と共にロシア文學の二大平行線だといはれて居る。主人公たる三人の兄弟の中イヷンは西歐羅巴を、ミチアは現在のロシアを、アリヨーシャは全人類を包括すべき將來のロシアを體現したるものと稱せられてゐるそれ故本書は過現未のロシアを最も大膽に藝術的に表現したものである。日本でもこの書の譯が二三出てゐるがまだ完結してなかつたり、あまりに單簡すぎる梗概譯ばかりである。本書はその中の最も完全なものである。

（諸新聞雜誌及文壇名家は悉く本書を激賞せり、好評三版出づ）

▲著者卷頭に序して曰く。メレシユコフスキーは次のやうにいつて居る。ドストイエフスキイの作はその人自からを見るやうな作である。ドストイエフスキイは人生を苦しんで生きた人である。生きた、苦しんだ、そして泣いた。其自分の苦しい生涯を藝術として現した人である。實に藝術として鑑賞する許りでなく、讀者はその作物を見ると實際作者の泣いてゐる姿が見える。作者は苦しみを訴へて居る。只讀んで居るのではなくて作者と一緒に苦しみ、一緒に生きるのである。心臟の鼓動を共にするやうな心持がする。ドストイエフスキイに同情するといふだけではどうも物足りない。その生活の中へ捲込まれて、主人公と一緒に生活する。でかくまで讀者を引きつける特長は何かといへばその主人公の心理を描くことが優れてゐるからである。どんな複雜な飛離れた心理でも明細に顯微鏡で覗く樣に描いて見せる。人間の内部生活を其儘擴げて見せる。從てどうしても主人公と一緒にしてしまはなければ置かない。ドストイエフスキイの作がインテレクチユアルだといふのは主として緻密な何處迄行つても止まないやうな解剖にある。尤も只分類したり綜合したりすると言ふ意味ではなく、本當に創造するのである。ドストイエフスキイは單なるインテレクチユアル・マンではない。もそつと眞實に物を見、物を摑まへて來る人である、智的ではあるが同時にクリエテイーヴである。オリヂナルである。

發行所 東京市本郷區元町二丁目二十五番地（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

■生田長江氏の新論文全集

最近の文藝及び思潮

四六版四百頁
布裝美本箱入
金一圓稅八錢

著者は權威ある文壇の高等批評家である。文壇の巨星森田草平、島崎藤村、夏目漱石、田山花袋、正宗白鳥の大物を俎に載せて手際よく庖丁目を入れて行く冴えは見上げたものである。著者の頭は鋭いがイラ／＼せず論理的であるがパッションを失はない。加ふるに其筆にデリケートなウィットを滴らしてゐる。尙「不正直なる沈默」以下十數篇は著者の自己及文壇に對する見識の正直且つ大膽なる告白で前の人物評論と合せて最近の文藝及思潮の精髓を窺ふに足る。（世界新聞）

■森田草平氏傑作煤煙續編

縮刷 自叙傳

菊判四百餘頁
布裝美本箱入
九十錢稅八錢

粗き布のポットリとした裝幀なり、此作は云ふまでもなく作者の興味ある生活をさながら打出せるものとして「煤煙」と共に有名なり、安倍能成、阿部次郎兩氏の評を附す。（新潮）

同じ著者の「煤煙」と共に最も眞面目に一生懸命になつて書いた作で、世をして驚嘆せしめ作者の地位を固めたものである。今や「煤煙特製」と同形同體裁の縮刷となつて現はれた。更に愛讀者を增すことであらう。卷末に著者の友人の評が收めてある。（讀賣新聞）

■江部鴨村氏の新研究解說

タゴールの思想及宗教

四六版二百頁
美裝優雅箱入
七十錢稅八錢

タゴールの思想を消化し問題の要點を把握して自在に之を說明し去つてタゴールの內生命を紹介せんとしたる所は其の特色なり、タゴールを語るものゝ中大體を領せんとするものに手頃の書として推薦す。（朝日新聞）

印度の哲人タゴールの思想と宗教との大體を何人にも解るやうに極めて平易明快に說てやがて來朝の噂ある哲人を迎へんとする我讀書界に資して及我等が思想生活を豐富ならしむる一冊たらしめた良書である。（國民新聞）

■高濱虛子氏作 長編 附錄 子規書翰

子規居士と余

四六版三百頁
クロース美本
九十錢稅八錢

子規と著者は同じく伊豫の土に生れ同じく俳名を一世に擧げ其交情師弟の如く兄弟の如く親友の如きものあり、著者故人を懷ふ事深く茲に此書あり更に故人の寄せたる書翰百數十通を添へて之に江湖に示せり。（時事）

或時代の生める特異の文學者之を圍繞せる一團の青年と其清き文藝憧憬の念、是等が率直に敍述されてゐる一篇の作品と見るべく子規氏の傳記とも云ふべく而して又一面明治文學史の一部とも稱し得べし。（報知新聞）

發行所 東京本郷元町二丁目二十五（振替東京二八九一四 電話下谷三二〇六）日月社

即位式御大典紀念　法學博士廣池千九郎先生謹著

伊勢神宮と我國體

大隈伯爵閣下補教

文學博士故井上頼圀先生序
文學博士井上哲次郎先生序

【神宮中心國體論】▲神宮を中心とせる國體論發生の沿革▲我建國の基礎的精神▲神宮皇居の分離▲天祖の御位置と歴代の御聖徳▲我國體の淵源と我國運發展の方法

【伊勢神宮】▲伊勢神宮と我國體▲神宮創立の理由▲豐受大神宮創立の理由▲兩宮の御稱號御社格▲内外宮と支那の宗廟社稷▲兩宮神殿の御建築法▲神宮の御威徳と教育事業▲神宮の大祭典と皇室及び國民▲神宮の神聖▲歴代天皇の神宮御崇敬▲明治天皇の神宮御崇敬▲神宮と學校教育並に軍隊教育等

【伊勢神宮附說】▲神宮御創立に關する古書の杆格に就ての考證、神宮古記録の日本書紀古語拾遺等より確實なる理由▲皇大神宮の宮地の變遷▲神宮の沿革▲古代より維新前に至る神宮官衙の組織▲現時に於ける神宮諸官衙▲兩宮御祭典▲勅使及儀仗兵▲遷宮制度歴史▲大麻及暦▲行幸並皇族縉紳の參拜▲庶民の參拜並御蔭參り▲兩宮相殿の神▲別宮攝社末社等、其他數十項略

【附錄五章】【補說三十六章】内容見本進呈

四六二倍版總洋布特製三百頁定價二圓送料内地十二錢臺灣樺太三十錢朝鮮、清國四十錢

廣池博士宗教的信仰を獲得するや忽然我國體の淵源に關して、大發見をなし先輩の贊同を得て舊著「伊勢神宮」に神宮中心國體論を加へ改題發行するに至れり。

神社崇敬と宗教

菊半截總洋布製三百頁定價五十錢
送料六錢（宗教叢書五篇分）

【緒言】予は今日まで各地に於て始終神社の崇敬地方自治制青年修養等に關して講演を爲したのであるが其中にて神社崇敬の事が一番地方人に分つて居らぬやうであるから今回之に關する極めて大體の事を示す事にしたのである尤も此企は各地の神職諸君からも度々要求せられたのが一つの動機と傍つたのである。ほんにこれは通俗的にて且概說に過ぎねど幾分なり神社崇敬の趣意が一般國民に正解せられて其實際上の効果を收め得るやうになる一つの手引ともならば洵に國家の幸であると考ふ。

【目次】▲總論▲祖先崇拜と家族制度▲神社の歴史的性質▲國法上に於ける神社の性質▲神の實質と人心の訓練▲神社崇敬に關する國民の心得▲神社崇敬實行上の施設參考資料▲宗教的神道の信仰▲神道教會の必要▲普遍的宗教と神社▲予の天理教教育部に於ける施設の一斑▲神官神職の神社奉仕法并に其修養法▲町村長の神社崇敬の心得▲氏子の神社崇敬の心得【附錄一】官國幣社一覽表【附錄二】神祇に關する和歌

發行所　東京本郷元町二丁目　宗教叢書文藝書發行　電話下谷三二〇六番　振替東京二八一九一四　日月社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

現代百科文庫

一編に付 十錢税二錢

五部以上は 郵税不要

新宗教の暗示 宗教叢書

- 宗教の新意義(三編分) 谷本博士
- 神社崇敬と宗教(五編分) 廣池博士
- 宗教入門 江部鴨村
- 神道網要 西川光次郎
- 救世軍 同
- カラマゾフ兄弟(六編含有) 森田草平
- シャクンタラ姫 同
- 大聖釋尊 江部鴨村
- 高僧と母 同
- 續高僧と母 同
- 俳聖芭蕉 岡本默骨
- 道元と親鸞(四編分) 村上博士
- 天理教祖觀(五篇分) 奥谷文智
- 金光教觀 和泉乙三
- 親鸞と法然 村上專精
- 立正安國論略解 柴田一能
- 教徒として見たる天理教 廣池千九郎
- 耶蘇基督 前島潔
- カーライルの宗教 淺海寧一
- 近代思想と宗教 柏原祐義
- 十六羅漢 山邊習學
- オーガスティン論 小宮豊隆

文藝思潮叢書

名流論作

- 父と母と娘(小說) 森田草平
- 無用語(評論) 安倍能成
- 銀座の夜(小說) 小宮豊隆
- 藝術家と藝人(評論) 生田長江
- 三十三の死(小說) 素木しづ
- 杏の落ちる音(小說) 高濱虚子
- 一から四まで(小說) 河東碧梧桐
- 文藝評論(評論) 小宮豊隆

古今名著眞髓 梗概叢書

- 神曲 ダンテ 森田草平
- ベル・アミー(發賣禁示) モオパッサン 德田秋聲
- 懺悔錄 ルーソー 生田長江
- マダム・ボヴリー フローベール 相馬御風
- 死の勝利 ダヌンツィヨ 水上齊
- 英雄崇拜論 カーライル 中村古峡
- ドリアングレー ワイルド 相馬泰三
- 女の一生 モオパッサン 廣津和郎
- 春の眼ざめ ウェデキント 生田長江
- 武器と人 ショウ 福永挽歌
- ポオラ(外一編) ヒネロ 加藤朝鳥
- ファウスト(三編分) ゲーテ 森田草平
- オルレアンの少女 シルレル 水上齊
- アルネ ビヨルンソン 相馬泰三
- 決闘 クープリン 横田東聲
- ベルグソンの哲學 中田直平

日月社

出版圖書目錄進呈 電話下谷三二〇六

十月中特價目錄進呈 振替東京二八一九四

科學と文藝

拾月號

體裁整頓
内容益々充實

價廿五錢
郵稅貳錢

自然科學者としてのゲエテ……小川政修

自分の具体的問題……安倍能成

ダ・ヸンチ(紹介)中山昌樹

シングの生涯(紹介)喜多村進

サッコとワシカ　井上芳子

バンガロー(紹介)西村伊作

丘の家(アーニン)……西川松子

豫算表(小說)……沖野岩三郎

モンマルトルの畫室……よさのひろし

Deep Lying……T. Okada

教會存立の意義及價値に就て　諸大家

挿繪

岸田劉生　安井曾太郎　西村伊作　ロセッティ　レンブラント　宮城文子　レビン　又木享三　津田青楓　カミール　木村荘八　椿貞雄

詩歌

原阿佐緒　西村伊作　吉田浩助　霜田史光　前田春聲　高野孤龍

ジプシーの色々　辻潤

音聲と表情……小酒井學士

結核の話……M・J學士

生物と光……藤浪博士

自己靈の叫び……野村隈畔

畫家と金と……岸田劉生

海外消息

九月の文壇……美川康

宗教道德の第一要素(ギュイヨー)內藤濯

種族の精神と個体の生活……加藤一夫

●本然と表現

▲加藤一夫著▼

▲洛陽堂發行▼

近刊●

東京市牛込區西五軒町卅五

天弦堂

振替口座東京貳九五五九番

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

昭和44年10月30日発行　【第7回配本】

青鞜第5巻　10月号

編著者　平塚らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
P4
776
845
V.5
no.9

University of Colorado at Boul[redacted]

[redacted]304 6746563

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第五巻

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER